慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	瞿秋白「多余的話」異聞：「豆腐」の謎を解く：試論
Sub Title	The reason why Qu Qiubai referred to doufu at the end of his last essay superfluous words
Author	長堀, 祐造(Nagahori, Yūzō)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.13 (2020.) ,p.159- 220
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20200331-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

瞿秋白「多余的話」異聞

――「豆腐」の謎を解く――試論――

長堀祐造

はじめに

瞿秋白の遺著「多余的話〔余計な言葉〕」[1]は、今日では中共初期指導者本人が、一九三五年六月、国民党によって処刑される前に書き残した自己省察的な辞世の文章と広く認定され、改革・開放後に刊行された新版『瞿秋白文集』（「政治理論編」八巻、「文学編」六巻。一九八七～一九九八年）にも収録されている。[2]

しかし、瞿秋白の死後ほどなく「多余的話」が国民党系メディアによって公表された当初は[3]、その筆致が中共指導者としての自己の経歴にあまりに否定的であり、また読みようによっては中共批判に傾くことから、中共は非転向で従容として義に就いた瞿秋白のものではあり得ず、したがって国民党による偽造だとし[4]、魯迅も瞿秋白が書いたものではないと鹿地亘に断言していた[5]。さらに瞿秋白未亡人楊之華も同様にこれは国民党が改竄した文章で瞿秋

白のものではないと否定してきた。[6] 新中国では、中共は「多余的話」偽造・改竄説に立って、瞿秋白に「烈士」の称号を授与してきたのであるが、一九六〇年半ば、文化大革命発動前夜[7]から「多余的話」は国民党の偽造ではなく、瞿秋白の「裏切り＝転向」の文章だという批判が周恩来によって提起され始めた。そして、ほかでもない周恩来が一九五五年六月に主宰した遺骨安葬の儀式を経て八宝山革命烈士公墓に埋葬された瞿秋白の遺骨は、文革が始まると紅衛兵によって曝かれるところとなった。瞿秋白は中共によって「烈士」から一転、「叛徒」とされるに到ったのである。しかし、改革・開放期に入ると、「多余的話」は基本的に瞿秋白の文章であると認定しつつも、これは逮捕下、処刑前という特殊な条件のもとで書かれた瞿秋白の深い自省の弁であり、一部は当時の王明路線への批判も込められた政治的文章でもあるという見方が定説となっていった。[8] 文革の深い傷を経験した中共は「多余的話」を「裏切り＝転向」の文章とはもはや見さなくなり、文革中の「叛徒」という瞿秋白評価は再び逆転して「烈士」の地位を回復するとともに、新版『瞿秋白文集』が刊行され、「多余的話」も収録されることとなったのである。

複雑な歴史的変遷を経て基本的評価が定まった「多余的話」であるが、謎が完全に払拭されたわけではない。様々な読みが今も試みられている。本論が扱うのは「多余的話」最終章「告別」の最後の一句についてである。曰く「中国の豆腐も非常にうまいものだ、世界一だ。〔永遠に〕お別れだ！[9]〔中国的豆腐也是很好喫的東西，世界第一。永別了！〕」と。

なぜ永遠の別れを告げる際に「豆腐」が出て来なければならないのか。魯迅はこの一節を国民党の「無学な奴等」が金聖嘆の辞世の句を真似て書いたもので、瞿秋白がこんなものを書くはずがないと語ったのだが、実は魯迅は「豆腐」の謎を知っていたに違いないのだ。「多余的話」掉尾の一句は、最愛の夫人、楊之華、及び肝胆相照らす「人生の一知己」魯迅に向けて発せられた瞿秋白の告別の辞、心の叫びであったのではないかというのが本論の

趣旨である。

一　「多余的話」の公表とテキスト確定の経緯

まず、行論上の都合から、主として「多余的話」に関する先行論文等に拠りながら[10]、瞿秋白の略歴と逮捕から処刑に到る過程、「多余的話」の内容、さらにその公表の経緯を簡単に確認しておきたい。

（1）瞿秋白の略歴

没落読書人の子弟として一八九九年、江蘇常州に生まれた瞿秋白は、北京に出てロシア語を学び、折からの五・四運動に際し学生指導者の一人となった。一九二〇年、『晨報』特派員として革命ロシアに赴き、当地で中共に加わり、一九二二年十一～十二月、ペトログラード次いでモスクワで開催されたコミンテルン第四回大会に出席した陳独秀の通訳を務め、中国国内の活動発展のため帰国を促されて翌年帰国、中共が実質的に運営する上海大学で教鞭を執り、さらには中共中央で理論・宣伝部門の指導者となって、中共機関誌『新青年』、『嚮導』、『熱血日報』などの編集に当った。しかし、北伐や農民問題などで陳独秀と見解を異にし、四・一二クーデタ直後の一九二七年五月に武漢で開かれた中共第五回大会では名指しは避けながらも陳独秀批判を展開、国民党との統一戦線の破綻、混乱する共産党の状況を収拾すべく開催された八・七会議で、瞿秋白は陳独秀の後を襲い、事実上、中共の最高指導者となった[11]。ときに二十八歳。ちなみに陳独秀はこのとき四十八歳、魯迅は四十六歳、毛沢東は三十五歳である。

高いロシア語能力を資本とし、コミンテルンを後ろ盾に、若くして中共内で指導権を確立した瞿秋白であったが、その執行した方針は、一九二八年モスクワで開催された中共第六回大会では左傾盲動路線として批判され、指導権を失って駐コミンテルン中共代表としてモスクワに留め置かれた。一九三〇年、当地でスターリン直系のミフ、王明らと対立、トロツキー派に転じたモスクワ中山大学の多数の中国人留学生に融和的だなどの理由で駐コミンテルン中共代表の地位をも解任された。同年、瞿秋白を継いで実質上中共指導者となった李立三が推進する都市暴動路線、いわゆる李立三路線がコミンテルンから批判を受けると、瞿秋白は李立三路線停止のため、周恩来とともに中国に帰国するが、その対応が生ぬるいとして、コミンテルンから調和主義、半トロツキストのレッテルを貼られ、一九三一年一月、ミフや王明らにより中共党規約を無視して[12]強行開催された中共第六期四中全会（以後、四中全会と略記する）において党中央政治局から追放されたばかりか、屈辱的な自己批判の声明を強いられたのである。この後、党中央での政治生命を失った瞿秋白は上海で左翼作家聯盟など文化戦線での活動に専念し、一九三二年半ば、魯迅と知り合い、親交を結んだ。魯迅が文芸批評家、翻訳家としての瞿秋白を高く評価し、またその為人にも共感して「人生得一知己足矣、斯世当以同懐視之（人生一知己を得れば足れり、斯の世当に同懐を以ってこれを視るべし）[13]」という対聯を送った逸話は有名である。

一九三四年初め、中共中央の指令により瞿秋白は上海を離れ、中央根拠地のあった瑞金へ向かう。別れの前夜、暇乞いに訪れた瞿秋白に魯迅は自分のベッドを譲り、自らは床に寝たという逸話もよく知られているところだ。瑞金で留ソ派に権力をそがれて無聊を託つ毛沢東は、瞿秋白、馮雪峰と魯迅談義をするなかで、魯迅の政治的な重要性に気づき、魯迅作品を読むことに傾注したという[14]。

（2）瑞金時代から逮捕まで

瑞金の中央根拠地で教育人民委員（中華ソヴィエト共和国臨時政府の閣僚ということになる）の任に当たっていた瞿秋白であるが、瑞金は国民党による波状的な囲剿攻撃のため危機に陥り、一九三四年十月、中共は瑞金を放棄して長征を開始する。結核を患っていた瞿秋白は帯同を許されなかったが、これには中共留ソ派指導部が病気を口実に故意に瞿秋白を排除したという見方がある。失脚したとはいえ、国民党に見つかれば生命の保証がない瞿秋白のような中共最高指導者を、留ソ派指導部はわざと見捨てたというのである[15]。この説には反論もあるが、実際、帯同を認めなかったのはスターリン、コミンテルンの意を代表していた博古（秦邦憲）一人の決裁であったことは事実であり、後年博古もその責任を認めていたという[16]。中央根拠地の留守部隊に残った瞿秋白は、国民党の圧力がますます強まる中、香港を経由して上海に行き、治療に専念しようとするが、その途次、一九三五年二月、福建省長汀県で逮捕された。当初、身元を隠していたが、四月には中共福建省委書記万永城の妻の裏切りにより、瞿秋白であることが暴露された[17]。瞿秋白は以後、国民党の取り調べに対し、「筆供（供述書）」を書いたとされ[18]、さらに「多余的話」や数首の詩詞を書き残したが、国民党の転向要求には応じなかったため、蒋介石の命により、六月十八日、銃殺刑に処されて三十六歳の短い生命を終えた。

（3）「多余的話」の内容

「多余的話」は瞿秋白が、処刑されるほぼ一ヶ月前の五月十七日から五月二二日にかけて書いた文章である。前述の通り、現在では中共も基本的に瞿秋白の書いたものと認定しており、『瞿秋白文集　政治理論編』第七巻にも付録として収められている。「何も書く必要は……（代序）〔不必説？（代序）〕」、「歴史の誤解〔歴史的誤会〕」、「脆弱な二元的人物〔脆弱的二元人物〕」、「私とマルクス主義〔我和馬克思主義〕」、「冒険主義と立三主義〔盲動主義和立三主義〕」、「文人」、「告別」の七章からなり、二万字ほどの分量がある。「代序」で瞿秋白は執筆動機を、「歴史的葛藤」に巻き込まれた自分が、人に「崇拝」されたり、自分の著作が何とか主義を代表すると青年たちに誤解されたりするのを恐れ、最期に当たって本心を書き置きたいとする。曰く、十五年来、無理を押して中共指導者として政治工作に従事し、その役割を演じてきたが、武装解除され、革命の隊列から引き離された以上、残るのは自己自身のみである、と長征帯同の希望を中共指導部に拒否された恨みを含む[19]心底の言葉を語り、ボルシェヴィキの嫌うプチブル・インテリゲンチアたる自己を分析するのだと言う。「代序」の最後にある「ここに書くものが、読者の手にわたることはできないかも知れないことも、出版の価値がないかも知れないことも、私はよく知っている。しかし、やはり私は書こう」（丸山訳）という表現は「多余的話」をなぜ書いたのかを考えるとき、意味深長である[20]。すでに論じ尽くされた感もあるが、行論の都合上、「代序」の低回、韜晦風の基調の延長線上に続く「多余的話」各章の内容を見ておくこととする。

「歴史の誤解」の主旨は、ほぼ章題通りと言ってもいい。母の自殺後、北京に出てロシア語を学び、同時に文学

活動を始め、さらに『晨報』特派員として革命ロシアに赴いて当地で共産党員となり、コミンテルン大会に参加した陳独秀に促されて帰国後、上海大学で教鞭を執ったこと、そして、四・一二クーデタ後、八・七会議で中共の最高指導者の地位に就いたこと、一九二八年の中共六全大会で批判され、さらに李立三路線の処理をめぐって一九三一年初めの四中全会で党中央政治局から失脚したことを振り返るが、言わんとするのは、自分のような「文人」気質のものが中共指導者という虚名を担ったのは、歴史の誤解であったということである。比較的わかりやすい自己解剖であるが、ここで注意すべきは、政治工作について、「瑞金での一年間には、実際完全に興味を失っていた」と書くことである。瑞金での一年とは、一九三四年二月の中央根拠地到着から一九三五年二月の同地脱出に到る時期を指す。一九三一年一月の四中全会で中央政治局を排除された瞿秋白は、一九三三年九月に留ソ派が牛耳る中共中央が追い打ちをかけるように決議した「狄康〔瞿秋白〕同志の誤りに関する中央の決定〔中央関於狄康同志的錯誤的決定〕」（九月二二日付）に対し、屈辱的な自己批判を党中央に送っている（十二月十日付）[21]。決まり文句の羅列としか思われない通り一遍の自己批判であるが、同時期に中央根拠地の党中央から、上海での文化工作を打ち切って瑞金に馳せ参ずるよう命じられた瞿秋白には他の選択の余地はなかった。妻、楊之華を含め、瞿秋白にとって大事な人々は党と強く結びついていた[22]。党生活を終わらせることは瞿秋白にはできなかったのである。当然、瑞金での瞿秋白の心理には暗鬱たるものがあったろうから、自己解剖の言葉の間にさりげなく挟まるこうした政治的心理描写は、多くの瞿秋白研究者が言うように、単なる心理分析では理解できない政治的メッセージが込められていると見るほかない。

「脆弱な二元的人物」は先天的虚弱に加え、結核に蝕まれた身体条件での政治活動がどれほど過酷であったかを語り、政治指導の責任上、止めるに止められぬ重圧が休息を渇望させ、脳を麻痺させ、思考停止に追い込んだと書

く。四中全会で政治局から排除されて以降、「私の精神状態はたしかに「心が空っぽ」の状態であり、そのまま現在までつづいている」とも言う。ここにも四中全会の影が色濃い。またこの章の終わりでは、自らが選び取ったマルクス主義的世界観が旧社会で培われた自身内部の紳士意識、士大夫意識、プチブル意識と対立するという自覚を語る。身体的、精神的脆弱さを瞿秋白は見つめ、プロレタリアートの隊列はそんな自分を必要とせず、余生があるなら文筆の仕事だけしたいと願望を述べつつ、一番いいのは「さっさとおしまいにすること」だと締めくくる。魯迅とは十八歳の年齢差がある瞿秋白にも、自分が旧社会から来た人間であるという意識が強いことが見て取れる。魯迅が有島武郎の「宣言一つ」やその自殺を重く受け止めていたのは、階級移行の困難さを身にしみて感じていたからで、それは自分が滅ぶべき、中国旧社会の産物であることを自覚していたからにほかならない。魯迅と瞿秋白の「忘年之交」とも見られる友情は、実はこうした共通した自己認識を媒介としていたという面も考えに入れるべきであろう[23]。陳正醍は瞿秋白側の視点から魯迅との同質性を指摘している。有名な「『魯迅雑感選集』序言」冒頭が引く、「自ら因習の重荷を背負い、暗黒の閘門を肩で支え、彼らを広々とした光明の場所に逃してやる」（魯迅「私たちはどのようにして父親になるか」、『墳』所収）には、「魯迅のみならず瞿秋白自身の姿勢を読み取ることができよう」とし、それは瞿秋白の「次世代の解放のための、あるいは新たな社会の主人公の出現を促すための「捨て石」としての自覚に結びついている[24]」と書く。もっとも瞿秋白の場合にはさすがに魯迅よりも一回り半、若い世代であり、明確にプロレタリアートの時代を見据えた英雄主義の精神があると陳正醍は言うが、自己犠牲的精神は魯迅の「中間物意識」に相通じることも明らかであろう。

「私とマルクス主義」は若い頃からの老荘、宋代儒学、仏教思想から、マルクス主義へという思想遍歴を語り、革命ロシアでのマルクス主義学習歴に触れる。だが、一九二三年の帰国後、ほんの「うわっつら」の理論しか知ら

なかったのに上海大学社会学系教授として「マルクス主義理論家」とされたのは「虚名」を盗むものだったと告白する。しかし、この直後、瞿秋白は控えめながら、「誤解」に発するとしながらも、「中国における資本主義的関係の発展程度の分析、中国社会の階級分化の性質、階級闘争の情勢、階級闘争と反帝国主義的民族解放運動との関係の分析等々」を試みたことを述べる。次段で瞿秋白はこうした理論的貢献は全党的産物であり、かつそこには日和見主義的要素が混交していたと十分な留保をつけるのだが、ここには中国共産党の理論的水準の向上に寄与したという自負が多少なりとも見て取れるであろう（脇道にそれるが、歴代中共トップ、たとえば、陳独秀、瞿秋白、李立三、王明ら留ソ派、毛沢東、鄧小平――その後は話にもならないので触れないが――のマルクス主義的理論水準を考えてみると、瞿秋白は別格である。陳独秀、毛沢東でさえ、革命政治家であるが、理論家とは言えまい。ただ、陳・毛の二人――これに瞿を加えてもいいが――は中国の実際に発していたと言うことはできよう）。しかし、この「日和見主義的要素」が一九三一年の政治局排除という結果を招いたと自己批判風に述懐する。そしてこの時期、極度の疲労と喀血が再発したため「独立した思索」を止めたと書く。「一九三一年の初めに、私の政治と政治思想における消極的時期がはじまり、そのまま現在に至っているのである。その時以来、私は自分の政治思想を持っていない。……私はまさに最悪の党員で、とっくに除名されてもよかったのだ。なぜなら私は中央の理論、政策に思索を加えてみようとしなかったのだから。……」と述べるが、ここにも四中全会の仕打ちに対する「消極的」反論がある。続いて「私の一知半解のマルクス主義の知識は、当時においては若干の役割りを果たした――よい影響も悪い影響もすべて人がみな知っていることだ、私が自分で判断する必要はない――が現在では、私はすでに政治的に死滅した、もはやマルクス主義の宣伝者ではなくなったのだ」と再度、自身がかつてはマルクス主義理論家だったという自負を微かに見せている。瞿秋白は、「独立した思索」の停止を言うが、それはとりもなおさず一九三一

年以前は「独立した思索」を行っていたということであり、「独立」とはコミンテルンの指導、政策から「独立」に、マルクス主義理論に従って中国に即した分析、方針を示そうとする努力のことであり、瞿秋白はそれをしてきたと言いたいのであろう。しかし、コミンテルン、スターリン直系勢力による党中央指導権の簒奪を前に、瞿秋白は結核の病状悪化と相俟って、政治的気力を完全に喪失したということだ。おそらく、一九三一年以降、瞿秋白と親しく接し、心情を理解していた者たちがこれを読めば、表面上は種々の配慮をともなった反応を示したとしても、少なくとも心の底では「多余的話」が国民党の完全な偽造だという説には与せなかったに違いない。

さて、「もはやマルクス主義の宣伝者ではなくなった」という瞿秋白であるが、「私はもうマルクス主義を放棄しかかっている、というなら、それも正確ではない」とも言う。積極的に共産党政治を推進する気力、体力は失せてしまったが、マルクス主義の世界観、理想は放棄していないというのが瞿秋白の最後の一線であった。国民党への投降、転向は不可能だったのである[25]。

「冒険主義と立三主義」は「多余的話」の中ではやや異質な印象を受ける章である。最後の三分の一を除くと、内面や資質に対する自己解剖は抑制され、いわば瞿秋白の政治生涯について客観的政治用語で語られた「総括」文章のように見える。六大での瞿秋白冒険主義〔左傾盲動〕路線批判を受け入れつつ、農民問題の認識が不足していたとか、「瞿秋白主義」が立三路線の基礎にあるなどと過度とも言える自己批判が基調にあるが、広州暴動までは正しかったと部分的には自らの指導の正当性を主張してもいる。無論、自己批判の部分を文字通りに受け取るのはナイーブであり、王明ら留ソ派指導部に対する恭順の意の表明が先立つこの部分で、瞿秋白の本心がどこまで出ているかはさらに党史を踏まえた分析が必要であるのだが、この章が自身の政治総括風の文章であることは否めない。

その中で目を引くのは、一九二九年のモスクワ中山大学で中国人留学生間に生じた激烈な闘争についてである。

王凡西によれば、当時、中国革命の路線問題で多数の留学生がトロツキー派を支持するようになっており、すでに中共派遣留学生の間にはトロツキー派の秘密組織まであった[26]。瞿秋白は言う。「互いに非難、批判しあう多くの同志がどれも正しく思えた。かれらがいうことを聞くとしばしば非常に変なところあり、すべて故意に事実や行為を誇張して、「相手」を打倒するための理由にしているように思えた。それで私は調停的立場に立ったのである。このことがモスクワの党組織に、私がまさに日和見主義と異端分子の庇護者であると考えさせ、その結果私の中国共産党モスクワ代表の職務が解かれ、帰国を準備することになった」と。異端分子とはトロツキストを指すと考えられる。瞿秋白はスターリン、王明らとは一線を画していたのがわかるが、これこそ「独立した思索」の結果にほかなるまい。スターリン主義は独立思考を容認しない。「四中全会後に……私を政治局員から除くことが決定された。……まさにこの罷免が、私に千鈞万担の重荷をおろさせてくれたことを感謝した。……一九三一年一月七日〔四中全会の日付〕には、私は中央の政治指導機関を離れ……事実上この時から政治舞台を離れたのだった」。瞿秋白の政治生命はここまでだったのである。

そして、本章の残りの三分の一では、政治舞台を離れて念願の文芸訳著の仕事に戻ろうとしたが、遅すぎると感じたと言い、「すぐつづいて大病になり、一進一退で三年の時をついやしてしまった。一九三四年一月、上海で療養することが不可能なため、また瑞金に逃れ……人民委員の閑職を担当した」、そして、適当に責めを塞ぎ、政治に飽きながらも一年を過ごしたが、自分の政治生命はとっくに終わっていたのだと言う。一九三一年以降の四年間にも政治的誤りを犯したように記憶するが、「私は歴史の最も公平な裁きを受けたい」のだという言葉でこの章は締めくくられる。

この部分には明らかに虚構がある。一九三一年からの魯迅との交友期間を含む一九三一年以後、一九三四年まで、

瞿秋白は文芸訳著を数多く著している。確かに病気で死線をさまよった時期があったのは事実だが[27]、この三年間、何もできなかったかのように書くのは偽りで、実際は筆名で多くの文芸訳著を発表していた。しかし、これらが自分の訳著だと明らかにすれば、魯迅をはじめ関係者に多大な災難が及ぶことが予想されるため、瞿秋白は関係者を守ろうと嘘を書いているのである。こうした関係者、組織防衛の意識は、後述の瞿秋白の獄中インタビュー記事でも明らかである。

以上五章が、一九三五年五月十七日から五月二十日の間に書かれた部分である。

次章「文人」では、前章と比べると政治の言葉がやや減り自己解剖（文学）の言葉がその分増えたような印象である。瞿秋白は自分が「無用」で「柔弱」な文人であり、高等遊民に過ぎなかったと言う。孔子の「忠恕」を学んだがために「調停派」になり、革命家の資格もないのに、「体面」のためにボルシェヴィキの隊列に巻き込まれたと。大学教授も政治家も演技でしかなく、しかもなりきるほどうまく演じたという認識を示す。世界は舞台、人は役者、登場してはまた退場する、というシェークスピアの名言のごとくである。

しかし、後段では瑞金の中央根拠地でソヴィエト教育の仕事に従事する中で、文人、書生から実際生活を感じ取る一歩手前の境地に到り、「「もとへもどってもう一度生活しなおしたい」と強く願った」と言い、根拠地での教育実践、土地革命の実際性にかすかな明るさを展望していたようである。

最後に、自分は文芸面では一定水準に達していたが、他人の批評ばかりで自分では実作でいいものは残せず、「読者」に過ぎなかったと総括し、つぎのように締めくくる。

「私がほんの少しばかり持っていた具体的知識といえば、ロシア語しかなかったろう。もしロシアの文学的名著を、細かく、ていねいに、ごく忠実に、中国語の面では一語一句吟味しながら翻訳できれば、「人の子弟を誤る

〔誤らせる、教師として不適格を言う〕」こともなかったかも知れない」と。

これは読みようによっては、広くはロシア語の政治文献を翻訳した結果、コミンテルンの誤った路線を中国に持ち込んでしまったという反省とも、狭くは中国の学生たち（たとえば丁玲や楊之華などを初めとして）を「誤らせる（困難な政治の世界に引き込む）」こともなかったという悔恨と読めなくもない。

「多余的話」最後の段は「告別」、文字通り別れを告げる章である。まず、共産党の同志たちに言う。すでに自分は革命の隊伍から退き、武器を置いていること、そして自分のような旧社会の紳士、士大夫的意識と感情をプロレタリアートの階級意識に変えることのできない、「脆弱」で「いいかげん」で「消極的で怠惰」な人物は党から除名すべきだと言う[28]。「隊伍からさっぱりと追い出されるべきものは、結局さっぱりと追い出されるべきなのだ」「諸君〔おそらくは当時の留ソ派指導部を主に指すだろう〕はずっと以前に私も裏切り者の一種だと認める権利を持っていた」ではないかと。こうした言葉は一方ではしかし、長征帯同を希望しながら、博古に却下され死地にさまよう仕儀となったことへの恨みも込められ、また、ソ連では一九三四年末のキーロフ暗殺事件に連座して、ジノビエフ、カーメネフら元反対派メンバーが一九三五年二月までには有罪宣告を受けるという事態が進行していたことを瞿秋白が知っていたとすれば、スターリン直系の留ソ派指導部に対する皮肉を込めた抵抗とも読める。

瞿秋白はこれに付け加えて、自分のような歴史の偶然が作りだした、うわべだけの指導者が「烈士」に奉られるのは堪えられないとも言う。死んでも「烈士」を僭称したくないと言うのだ。こういう潔癖さは、「革命人」や「同伴者」を決して自称しなかった魯迅と相通じる気質である。

さて、「告別」前半は、長年の極度の疲労を訴え、「永遠の休息」をひたすら願うことを同志たちに述べて終わる。後半は、楊之華のことが語られる。まさに終幕は近い。妻にだけは本心をちょっと口にしたことがあったが、その

ほか「これという友達もなく、親しい人もごくわずか数人だけだった」とし、隠してきた自分の仮面を剥ぐのは痛快だと述べる。そして自分の心は「もっとも親しい人〔つまり楊之華〕」に残ると言う。

私生活においても、私は生存競争の勇気を持たず、自己の生活を組織することができず、ごく簡単な、ごく平凡な小さなこともすることができず、つねに私の唯一の肉親にたよってきた、どうして心を残さずにいられよう？　私は非常にたまらなく感ずるばかりだ、私はこの肉親に対してすまないことをたくさんして来たのだから。中でも、私の精神的怯懦のため、私が彼女に対しても、ついに徹底的にありのままを見せなかったことだ。ただ、願わくば、彼女がこのことで私を嫌い、私を忘れ、私を心安らかにしてくれることを。

私はまだ何に心が残るだろう。この美しい世界の、活気にみちた子供達にだ。「私の」娘、そしてすべての幸福な子供達、私はかれらのために祝福する。

この世界は私にとって相変わらず非常に美しい。あらゆる新しい、闘争する、勇敢なものが、すべて前進している。あのようにすばらしい花、果物、あのように清らかな山と水、あのように偉大な工場と煙突。月の光も前より明るさを増したようだ。

だが、永遠にお別れだ、美しい世界よ！

これは、人生総括の方向性が正負まったく逆ながら、なぜか、この五年後にメキシコで暗殺される有名なトロツキーの遺書を思い起こさせるような痛々しくも美しい文章である。

そして、最後の一節は「〔永遠に〕お別れだ！」という叫びで締めくくられる。

お別れだ、この世界の一切と。

最後……

ロシアのゴリキーの「四十年」（クリム・サムギンの生涯）、ツルゲーネフの「ルーヂン」、トルストイの「アンナ・カレーニナ」、中国の魯迅の「阿Q正伝」、茅盾の「動揺」、曹雪斤の「紅楼夢」などは、どれももう一度読んでみてもよい。

中国の豆腐も非常にうまいものだ、世界一だ。

〔永遠に〕お別れだ！

一九三五・五・二二

最終行の「〔永遠に〕お別れだ！」に到る部分まで、書き手の精神が次第に高揚して行くことがよくわかる。「多余的話」のクライマックスがここにあることは明らかだ。瞿秋白個人がより前面に出ている点で先の六章とは趣を異としている。

さて、「告別」最後の呼びかけ対象は疑いなく、楊之華であり、そしてその背後に隠されたもう一人は魯迅ではないか、ということが本論でこれから説き明かしたいことなのである。

（4）「多余的話」発表の経緯と「獄中詩詞」の報道

そこで、まず魯迅が生前目にした可能性のある、「多余的話」テキストや瞿秋白が国民党に捕えられ、長汀に移送されて以後に作った詩詞（陳正醍にならい「獄中詩詞」と呼ぶこととする）、また瞿秋白の逮捕、処刑の様子を伝える報道記事にどのようなものがあったかを確認したい[29]。

「多余的話」が最初に掲載されたのは、国民党中統系のメディア『社会新聞』第十二巻六、七、八期（一九三五年七～八月）においてである。これは、「歴史の誤解」「文人」「告別」三章のみの抄録であった[30]。全文を掲載したのは、それから約一年半後の『逸経』第二五期～二七期（一九三七年三月～四月）である。この間の一九三六年十月に逝去した魯迅は、「多余的話」の全文を見ることはなかったはずであるが、鈴木将久も指摘するように[31]魯迅は『社会新聞』で「多余的話」の一部を読んでいたであろう。実際、『魯迅全集』には『社会新聞』の誌名は散見され、同誌は魯迅をトピックに取り上げてもいた[32]。本論では魯迅の見た「多余的話」テキストが問題なので、基本的に『社会新聞』掲載のこの三章について考察することになる[33]。

ついで、瞿秋白の「獄中詩詞」であるが、これについては陳正醍の論文「瞿秋白「絶筆詩」考」が報道の経緯や詩詞の内容について詳細な考証をしているので、それに拠って本論に必要な資料を確認してみると、まず一九三五年七月一日付の『中央日報』の記事「瞿匪秋白　在長汀槍決詳情」が瞿秋白の処刑の様子と「多余的話」が残されたことを紹介した上で、「完渓沙」「夢回口占」「獄中憶内集唐人句[34]」の三首を付している。さらに、一九三五年七月五日付『申報』が「瞿秋白伏法記」で、拘禁中の瞿秋白に対するインタビューとともに「多余的話」に触れ、

「偶成」を掲載、同日付の『大公報』の記事「瞿秋白畢命紀」も「偶成」を載せている。この三日後、七月八日付の『大公報』に近い国聞通訊社の刊行物『国聞周報』（第十二巻二六期）が李克長による瞿秋白インタビュー記事「瞿秋白訪問記」を載せ、瞿秋白の経歴やその魯迅評価、楊之華や共産党要人についての質問、「多余的話」の脱稿と瞿秋白による記者への出版依頼など非常に興味深いインタビュー内容を報道するとともに、「完渓沙」「夢回口占」「獄中憶内集唐人句」を付している。

『申報』、『大公報』、『国聞週報』は『魯迅全集』から見るに、程度の差はあれ魯迅には身近なメディアであり、魯迅は瞿秋白の「獄中詩詞」を見ていたであろう。さらに、後述するが、魯迅は一九三五年四月から五月にかけての時期、瞿秋白からの救援依頼の書信も受け取っていたのだから、瞿秋白関連記事は特別の注意を払って見ていたに違いない。以上の諸事実を勘案すれば、魯迅は生前、瞿秋白の「多余的話」の「歴史の誤解」、「文人」、「告別」三章と「獄中詩詞」のうち、「偶成」、「完渓沙」、「夢回口占」、「獄中憶内集唐人句」の四首[35]及び李克長「瞿秋白訪問記」などの記事を目にしていたと考えるが妥当である。これを前提に魯迅は瞿秋白の遺作として報道された「多余的話」をどう受け止めたのか、考察したい。

二　「多余的話」に対する魯迅、楊之華、中共の反応

魯迅はまずどのようにして瞿秋白の逮捕・遭難を知ったであろうか。瞿秋白逮捕のニュースは一九三五年五月十一日の『中央日報』、『大公報』及び翌日の『申報』が報じるが、実際に瞿秋白が逮捕されたのは同年二月二四日のことである[36]。逮捕後、瞿秋白は身元が国民党に発覚する前に、偽名で魯迅の三弟周建人に救援依頼の書信を送った。

筆跡や偽名の示唆するところから、魯迅と周建人は瞿秋白が国民党に福建で逮捕されたことを知った。周建人は書信を受け取った時期を一九三五年の初春とする。楊之華の回想では同年一月から「ほどない〔不久〕」時期に魯迅、周建人から、福建発信の瞿秋白の偽名による書信が届いたことを知らされたとし、時間的前後関係については周建人の証言と矛盾しない。しかし、楊之華の回想では魯迅宛書信と周建人宛書信が別々に計二通あったように読めるのだが、周建人に拠れば、周建人宛に届いた書信を魯迅と二人で読み解き、瞿秋白が偽名で救援を求めて書いたものと見極め、そこで楊之華に伝えたということのようだ[37]。楊之華は魯迅兄弟からの情報で瞿秋白逮捕を知り、保釈の身元引受人を知人に依頼するなど救援に奔走し、魯迅もこれに協力して、金銭的な援助なども行ったのであった。

また、魯迅は一九三五年五月十四日及び二二日付の二通の曹靖華宛書信でそれぞれ次のように書いている[38]。「它兄が大病だと聞いています、しかも極めて確かなことで、おそらく治療は非常に難しいでしょう。〔『魯迅全集』注は它兄の大病とは、瞿秋白が一九三五年二月に福建で国民党に逮捕されたことを暗示すると記す〕。它夫人は元気だと聞いています」、「そのこと〔瞿秋白逮捕[39]〕は確実です。先月、私は確かな知らせを受け取っていますが、何ができましょう。文化上の損失は喩えようもありません」と。文字通りに読めば、周建人、魯迅は、五月十一日の『中央日報』、『大公報』及び翌日の『申報』の逮捕報道前の四月段階で瞿秋白の逮捕を知っていたということである[40]。そして、瞿秋白が銃殺されたことを知ったのは、おそらく、『申報』六月十九日の短信[41]に拠るであろう。六月二四日付の曹靖華宛書信には「十四日のお手紙、とっくに届いておりましたが、このところ翻訳に忙しく、今日ようやくお返事差し上げます。它兄の文稿、何人かの人が集めようとしていますが、私たちはまだ相談しておりません。〔瞿秋白の文稿が〕現代〔書局〕に二編[42]ありますので、買い戻さなければなりません。というのは、印税が前払いだったからです。このことは私ひとりで進めています。……私は泣いても無益だと思います。やはり一分の力

があるなら、その一分の力を尽くすほかない、その場だけことさらに憤激して、そのあとは悠々然としているというのは必要ないことです。……」と書いており、これは瞿秋白の死を受け、遺稿を回収することと、その死に対すべき態度を曹靖華に語っていると考えられるからである。『魯迅著訳系年目録』[43]の一九三五年六月十四日から二四日前後の条を見るに、この時期、魯迅が翻訳で忙しかった形跡は実際にはないのだ。十四日の『申報』の瞿秋白処刑の誤報、十九日の確報を目にして、魯迅は精神的ショックを受けたり、対応策を考えたりしていて曹靖華に対する返信が遅れたというのが実情であろう。許広平は『魯迅回想録』で、瞿秋白が銃殺されたことを知った魯迅は、「長い間、悲痛のあまり執筆する気にさえなれなかった」と述べているが、『魯迅著訳系年目録』の記載からもこのことは裏付けられる[44]。たとえ、曹靖華宛書信に基づく筆者の上記推測が誤りだとしても、上述の七月一日付『中央日報』の比較的詳細な記事や、七月五日付『申報』（ここには横たわる銃殺後の瞿秋白の遺体の写真まで載っている）及び『大公報』、七月八日付『国聞周報』、さらに同月から翌月にかけての『社会新聞』による「多余的話」の三章の掲載で、魯迅はどんなに遅くとも七月初めまでには瞿秋白の死が間違いでないこと、そしてその経過の大筋を認識したに違いない（加えて魯迅は、蔡元培、宋慶齢らを通じた国民党ルートからの情報もある程度持っていただろう）。

魯迅はこの一年あまり後には死去するのだが、周知のように魯迅は最後の死力を絞って、瞿秋白を記念するためにその翻訳遺稿集『海上述林』刊行に尽力したのであった[45]。

ところで、上述のように、魯迅は瞿秋白処刑翌月の『社会新聞』に連載された「多余的話」を読んだはずだが、「多余的話」の内容が翻訳遺稿集『海上述林』を編んで瞿秋白を記念しようという魯迅の決意を翻させることはなかった。その理由はまず、魯迅が「多余的話」を国民党の偽造だと考えたからだという説が成り立つかに見える。

日本の改造社が刊行していた『文藝』一九三六年五月号掲載の鹿地亘「魯迅と語る」で魯迅は実際、こう述べていた。

穆木天のことから、話は、国民党が如何に左翼の指導者等の文章を偽造して、逆宣伝の材料に使用しているかというようなことに移って行った。瞿秋白が捕えられて死の直前に書いたという文章が政府の新聞に掲載された。それを日高君は読んでいた。

「今となっては人生は夢のようものである。……そして最後に、魯迅の阿Q正伝と矛盾〔茅盾〕のなんとかとは是非もう一度読みたい。中国の豆腐は世界で一番うまかったと書いてありましたよ。」

「そんなことを瞿秋白がいう筈はない。」

と魯迅ははっきり打ち消した。確かにその言葉の空疎な虚無的な言いまわしは……〔ママ、「革命家」「共産党」などの言葉が伏せ字になったのだろう〕のものではなかった。魯迅は再び言った。

「瞿秋白の言葉では決してない。それに、中国の豆腐云々に至っては、それはつまらない模倣だ。清の時代に、金聖嘆という男が獄中で残した手記に、……〔ママ〕その味棄てがたし、という言葉がある。国民党の無学な奴等がそれをつくり変えたのでしょう。」

話は尽きなかった。

「魯迅と語る」冒頭には、このインタビューが同年二月に行われたとある。ここで瞿秋白の「多余的話」のことを持ち出している日高君というのは、インタビューに同席していた在上海のジャーナリスト、『上海日報』政治部

長、日高清麿瑳[46]である（実は胡風も同席していたが、「魯迅を語る」の中には出てこない）。この半年後、『文藝』五月号刊行からは三ヶ月後、鹿地と日高は瞿秋白が編集し、序文を付して出版した『魯迅雑感選集』の当の序文を日本語に翻訳し、「魯迅と中国革命」というタイトルで『日本評論』一九三六年八月号（第十一巻八号）に掲載している。しかも、この翻訳時には、鹿地は直接、魯迅に教えを請うていた[47]。鹿地、日高がこのインタビューの頃から、瞿秋白の逮捕や国民党の動きに関心を持っていたのは間違いないだろう。

「魯迅と語る」で注意すべきはまず、国民党が共産党の転向者の文章を偽造して反共宣伝に使っていると鹿地が述べていることである。そして日高が瞿秋白の「多余的話」の「告別」の最後の部分、「中国の豆腐」云々を待ち出すや、魯迅がすかさず、「そんなことを瞿秋白がいう筈はない」と言い、さらに「中国の豆腐云々に至っては、それはつまらない模倣」で、「国民党の無学な奴等」が金聖嘆の獄中手記を改竄したものだとして、瞿秋白執筆説を強く否定している点だ。魯迅は日本語が堪能であり、東亜同文書院出身の日高は中国語が堪能だった。鹿地は、中国語の通訳を日高に頼っていた[48]ので、インタビューはおそらく三人とも不自由しない日本語でなされたであろうから、雑誌掲載テキストも魯迅の日本語をかなりの程度正確に記録していると思われる。これに拠れば、魯迅は誰の目にもいかにも唐突な「多余的話」の「豆腐」云々の部分だけなく、この当時までに見ることが可能だった『社会新聞』掲載の「多余的話」テキスト全体を否定していると読まざるを得ない。ただし、それが魯迅の本音であったかどうかは、また別の問題である。

ともあれ、魯迅の「多余的話」偽造説は、瞿秋白をもっともよく知り、かつ中共と親密な協力関係にあると見なされていた当代きっての文豪の言葉である以上、当時もまた歴史的にも大きな影響を持ち続けた。

瞿秋白夫人、楊之華の「多余的話」に対する反応も魯迅と同様であった。楊之華は一九五三年発表の「一個共産

党人―瞿秋白」で国民党偽造・改竄説を主張しており、一九五八年発表の「憶秋白」でも、当初から瞿秋白の「自首〔投降・転向〕」を信じなかったと言うことでもって、「多余的話」偽造・改竄説を採ってきたと間接的ながら主張している。[49] さらに決定的な証言は、一九五三年、新島淳良の書信での「『多余的話』が国民党の偽作ではないか」との質問に対する返信である。

> 瞿秋白が獄中で書いた資料は、国民党反動特務によって偽造あるいは修正されたものでありますから、研究するまでもありません。〔至于他在獄中所写的材料，為国民党反動特務所偽造或修改，因此、不足以研究〕[50]

さらに中共も早くから偽造説を採っていた。陳正醍に拠れば、パリ刊行の中共機関誌『救国時報』第三七号、一九三六年六月の「秋白先生殉難一周年紀念」特集では瞿秋白の最期に関する国内新聞の報道内容に疑義を呈し、翌年一九三七年六月の同紙一〇六期では方林著「瞿秋白殉難両周年」が『逸経』の「多余的話」掲載を「瞿〔秋白〕の名誉を汚し「デマを飛ばして侮蔑し、世論を混乱させる」ものと見なして非難」した。[51]『社会新聞』の「多余的話」三章あるいは『逸経』の全文についてかは問わず、魯迅、楊之華、中共はみな国民党偽造・改竄説を採っていたわけである。これは上述の「魯迅と語る」の引用部にあるように、当時国民党が「左翼の指導者等の文章を偽造して、逆宣伝の材料に使用して」いたため、元中共最高指導者の一人、瞿秋白の「多余的話」の一見「消極的」で革命家にふさわしからざる口吻を中共は受け入れられなかったことに起因すると言える。

こうして「多余的話」は公表当初から、魯迅、楊之華、中共指導部がそろって、偽造・改竄説を主張したため、瞿秋白は文革期まで、新中国でも烈士とされ続け、未亡人、楊之華も要職[52]を歴任できたのである。文革期、改革・

開放期におけるその評価の変遷は上述の通りである。

では、生前の瞿秋白ともっとも親しく身近にあった、楊之華、魯迅は「多余的話」での瞿秋白の「自己解剖」を実際どのように読んだのであろうか。また、瞿秋白を執拗に批判し、長征帯同も許可せず、結果的に瞿秋白を死地に追い込んだ王明路線、及びその執行者中共留ソ派指導部に対する「多余的話」の暗示的な批判などを彼らは見抜けたのであろうか。さらには「多余的話」に込められたと思われる、二人及びその周辺人物にのみ理解可能な個人的、暗喩的メッセージは、瞿秋白の思い通りに伝わったのであろうか。「豆腐」の謎からそのことに迫ろうと思う。

三　「多余的話」の「豆腐」の謎――「豆腐阿姐」の成立と楊之華・瞿秋白・魯迅

「多余的話」の最終章「告別」の内容は、一の（3）で述べた通り、妻・楊之華への愛、さらに娘・独伊[53]への愛に満ちている。また「獄中詩詞」の紹介でも触れた唐人詩集句「憶内〔妻を思う〕」でも明らかだが、とりわけ楊之華への愛情は深い。「私の心は何に残るだろう？　自分のもっとも親しい人にだ。私は彼女にたよってこの十年の生活を送ってきた」と妻への限りない愛を隠さず、告別の辞を締める。再度引用する。

お別れだ、この世界の一切と。

最後……

ロシアのゴリキーの「四十年」（クリム・サムギンの生涯）、ツルゲーネフの「ルーヂン」、トルストイの「アンナ・カレーニナ」、中国の魯迅の「阿Q正伝」、茅盾の「動揺」、曹雪斧の「紅楼夢」などは、どれももう一

度読んでみてもよい。
中国の豆腐も非常にうまいものだ、世界一だ。
〔永遠に〕お別れだ！

瞿秋白がここに挙げる小説群は、どれも主人公などがロシア文学でお馴染みの「余計者〔中国語で言えば多余的人〕」の系譜に入る人物と考えていいだろう。[54]「多余的話」というこの辞世の文章の題意とほぼ呼応している。

そして最初に挙げられる「四十年」（クリム・サムギンの生涯）のクリム・サムギンには瞿秋白自身が仮託されてさえいる。魯迅が瞿秋白のために編んだ翻訳遺稿集『海上述林』下巻には、改造社版『ゴーリキイ全集』（一九三一～一九三二年）では全五巻にもわたるこの膨大な長編小説「恐らく、ゴーリキイの、最後の長編となるであろうと予想され、また、今日までの彼の作品中、最大の傑作といわるゝ三部作『四〇年』の第一部『クリム・サムギンの生涯』」（同全集、第二一巻の訳者西谷雅義による「『解説』に代えて」）の第一部上巻の冒頭の一部分、『瞿秋白文集　文学編』第六巻で言えば、十四、五頁ほどの未完の翻訳が収録されている。魯迅は「『海上述林』序言」（『且介亭雑文末編』所収）で「〔本書で〕編集のとき根拠としたのは、『クリム・サムギンの生活』の残稿〔不完全な原稿〕を除き、基本的に印刷されたテキストである」と書く。つまり、魯迅は瞿秋白の「残稿」を入手しており（『瞿秋白年譜詳編』に拠れば、瞿秋白の翻訳は一九三三年のこと）、「多余的話」が「再読に値する」としたこの作品の全体からすれば極々わずかな冒頭部分を敢えて『海上述林』に収録したのである（因みに『民国時期総書目外国文学』、書目文献出版社、一九八七年、に拠れば、民国期にこの作品の中国語訳はない）。「多余的話」で語る自己像に、クリム・サムギンが重なる点を汲んでほしいという瞿秋白の意思を、魯迅は尊重したというべきだろう。

『日本大百科全書（ニッポニカ）』の同作紹介はそれを証明する。「十九世紀の八十年代から一九一七年革命まで四十年間のロシアの歴史を背景に数百の人物を登場させながら、自分自身のエゴのみを追求する一人の知識人クリム・サムギン（サムとは自分自身の意）の自滅の生涯を追う形で、革命に至るロシア社会を描く大河小説。主人公に即していえば「空虚な魂の歴史」（作者のことば）である。主人公が作者によって好意をもたれていない点と、章によるくぎりを設けていない点に特徴がある」（佐藤清郎執筆）。魯迅は一九三一年に出た改造社版の『ゴーリキイ全集』第二一～二五巻の『クリム・サムギンの生涯』を一九三三年十二月二八日に購入して持っていた（中島長文編『魯迅目睹書目　日本書之部』、一九八六年、参照）。この第二一巻の扉の裏の頁には、ゴーリキーが妻に宛てた献詞「本書をマリヤ／イグナチエフナ／ザクレフスカヤ／へ捧ぐ」〔／は改行を表す〕がある。これも瞿秋白にとって重要な意味を持ったろう。そして瞿秋白は「多余的話」の第三章「脆弱な二元的人物」で「私は満三十六歳に過ぎないが（陰暦の習慣によって数えれば今年三十八歳だが）、自分でももう非常に衰弱してしまい、……」と言う。クリム・サムギン四十年の生涯は瞿秋白三十八年の生涯と重なるのである。さらに言えば、瞿秋白の「多余的話」のこの部分の原文表記にも気をつけなければならない。『社会新聞』版と『逸経』版及びそれに依拠する『瞿秋白文集』版はそれぞれこの作品を次のように記す。「俄国高爾基的『四十年』『克里麼・薩摩京的生活』」（前二者）、「俄国高爾基的《四十年》、《克里麼・薩摩京的生活》」（後者）。文学史を知らなければ、二つの別の作品のように見えてしまう。つまり、本来なら「四十年」は三部作の総タイトルあるいは副題とも見なせるので、『克里麼・薩摩京的生活：四十年』あるいは『四十年：克里麼・薩摩京的生活』のように記せる、あるいは記すべきなのだ。場合によっては、魯迅が『海上述林』で採用したように、単に『克里麼・薩摩京的生活』とすればいいのである。この「多余的話」の表記は、書写段階、印刷工程での誤りでないとすれば、「四十年」という歳月を際立たせ

るための瞿秋白の工夫だとも考えられ、魯迅にはそれが通じたということになる。

ところで、再読してもいい小説群のすぐあとに、こともあろうに瞿秋白が「中国の豆腐も非常にうまいものだ、世界一だ〔中国的豆腐也是很好喫的東西、世界第一〕」と言ってこの世との別れとしているのが、ある種の「謎」だったのである。なぜ、「豆腐」が出てくるのか。例外的な二人の人物、楊之華と魯迅及びその周囲のごくわずかな人々を除いて、瞿秋白を知る同時代の人たちも、また後世の人たちも字義そのものからこれを解釈することできなかっただろう。[55] これまで「多余的話」を論じた多くの研究が中国にはあるが、「多余的話」全体に評注をつけた劉福勤の『心憂書『多余的話』』[56]でも、「豆腐」の一句は義に就く前の「共産党人の風格」、「革命烈士の精神」、豪放な「ユーモア」とし、知之「豆腐好喫」[57]は瞿秋白が得た「精神の自由の心象」表現だとする。大筋において、この方向が主流の解釈であったと言えようが、結局それは窮余の「解釈」に過ぎまい。これを解釈するには、楊之華の小説、「豆腐ねえさん〔原題は豆腐阿姐、以下原題で行論する〕」を踏まえねばならないというのが、筆者がたどり着いた見解である。

「豆腐阿姐（トウフアージエ）」は丁玲主編の左聯機関誌『北斗』第二巻第二期（一九三二年五月）に「文君」の筆名で発表された楊之華の唯一の小説で[58]、一九三二年の第一次上海事変を背景に、「豆腐阿姐」というニックネームを持つ二十二歳の製糸工場の女工を主人公とした中編小説である。この主人公は豆腐のように白くみずみずしい肌の持ち主で、工場の男たちはよく彼女に言い寄り、からかった（原文は「打綳」、「喫豆腐」という上海方言）ためこの名がついた。「豆腐阿姐」は、同じ工場の機械工で先妻を失い十歳の娘を連れた阿明と結婚し、男の子をもうける。一家が夫家族の扶養や工場の劣悪な労働条件の下で苦しい生活を強いられる中、日本軍の侵攻により上海事変が起こる。「豆腐阿姐」一家は避難中に十歳の娘と行きはぐれ、その後、夫と幼子は日本軍に殴殺され、「豆腐阿姐」も日本兵に

陵辱され、正気を失って死ぬという悲劇で終わる。製糸工場、上海事変の状況描写は階級闘争、抗日の主張を担うものである。

この「豆腐阿姐」の登場人物設定には、楊之華自身の反映を見ることができる。「豆腐阿姐」は作中の現在では二十二歳だが、一九〇一年生まれの楊之華が瞿秋白と結婚したのは、一九二二年、数え年で二十二歳の時だった（「豆腐阿姐」の結婚時期は作中現在の二年前）。また、楊之華は瞿秋白との再婚以前に先夫、中共初期メンバーで有力国民党員でもあった沈玄廬の息子、沈剣竜との間に娘・独伊（一九二二年十一月生）がいたが、独伊は楊之華がこの小説を執筆した時点ではやはり十歳であった。楊之華が豆腐のように色白だったかどうかは現存する白黒写真から見るよりほかないが、病弱で色白のインテリ美男子というイメージの強い瞿秋白と並んで撮った有名な写真から見るに、そうと言えなくもない。「すごく綺麗というほどではないが、目鼻立ちはとても端正だった」と言う作中の「豆腐阿姐」の描写も楊之華と通じるように思える。因みに丁玲は楊之華が「とても綺麗だった〔長得很美〕」と言っている（「我所認識的瞿秋白同志」、『憶秋白』一四四頁）。文学史の通例を持ち出すまでもなく、作者は一定程度、主人公に投影されていると考えていいだろう。瞿秋白も当然「豆腐阿姐」に楊之華を見ていたはずである。後述のように、瞿秋白は原稿段階でこの作品を読んでおり、そこには瞿秋白の意見も反映していると見るべきだろう[59]。

ところで、この「豆腐阿姐」が掲載された『北斗』同期には、瞿秋白が易嘉の筆名で「五四と新たな文学革命〔五四和新的文学革命〕」（『瞿秋白文集　文学編』第三巻所収）、また、司馬今の筆名で、のちに謝旦如[60]によって出版される『乱弾及びその他〔乱弾及其他〕』所収の『乱弾』の一章「新英雄」六編を載せている（『瞿秋白文集　文学編』第一巻所収）。これは上海事変を受けて書かれた日本軍の中国侵略を批判する政論であるが、日本に抵抗す

る真の「新英雄」とは所謂「匪徒」（つまり内容からして共産党を指すだろう）だとする。ここで注目すべきは、「新英雄」の第三節「小諸葛」で恋愛と革命に明け暮れる小賢しい知識階級の「余計者〔多余的人〕」たちを批判し、「こういう「余計者」は本当に「余計だ」」と書いている点だ。わずか二頁余りの短文中に「多余的人」と「多余的」がそれぞれ二度、計四度出てくる。さらに、ここには孟子の「人の患いは、好んで人の師と為るにあり」（『孟子』「離婁章句上」）も引かれ、「多余的話」の「文人」の章の「人の子弟を誤る」などの表現とも一脈通じる。

これに止まらず、『北斗』同期には「我々はもはや騙されない〔我們不再受騙了〕」（『南腔北調集』所収）という魯迅としてはかなり政治的なソ連擁護の文章があり、茅盾も「我々が創造しなければならない文芸作品〔我們必須創造的文芸作品〕」を書いていた。さらに、馮雪峰は丹仁の筆名で「民族革命戦争の五月〔民族革命戦争的五月〕」を載せているほか、同期掲載の「豆腐阿姐」と葛琴「総退却」について作品批評を載せ、両作品はともに幼稚だが侮れない作品だとし、「豆腐阿姐」は「正面から戦争を描くのではなく、重点は戦争中の労働者の生活にある」としながらも、作者は立ち後れた労働者を素材にしており、彼らと先進的労働者との関係、上海戦争（事変）の本質に迫ってはいないと辛口の評価をした上で、こういう批評も作家のこの後の努力を助けるものだと締め括っている。主編・丁玲も彬芷の筆名で抗日、ソ連擁護、反国民党を、主題の割には軽やかに唄うエッセイ「五月」を載せている。所謂「紅い五月」運動[61]に照準を合わせて編集刊行された[62]『北斗』のこの期には、瞿秋白にとってとりわけ近しい人たちが寄稿していたのである。

丁玲は瞿秋白の最初の妻、王剣虹の親友であり、自身も瞿秋白に一時期、熱を上げていたことはよく知られている[63]。丁玲自身の言葉に拠れば、当初、瞿秋白とは相思相愛だったが、親友の王剣虹の瞿秋白を思う気持ちを知り、王に譲ったということだ。王剣虹は瞿秋白との結婚直後に結核で死に、瞿秋白はその年のうちに楊之華と再婚して

いる。[64] そうした経緯から丁玲の瞿秋白・楊之華夫妻への思いには複雑なものがあったが今はそれは置く。

馮雪峰、茅盾は上海での左聯の活動を通じて瞿秋白とは親しく、左聯の党団書記だった馮雪峰は謝旦如の家を瞿秋白夫妻に手配して、国民党の手から匿った。また、馮雪峰はその後、瑞金でも瞿秋白と親しく交友し、毛沢東も含め、三人で魯迅を語り合った仲である。[65] さらに言えば、馮雪峰は一九二八年初め、瞿秋白との恋愛に破れて胡也頻と同居中の丁玲が、一時恋に落ちた相手でもあった。[66] 茅盾について言えば、上海を離れ瑞金の根拠地に向かう際、瞿秋白は「「魯迅と茅盾とに別れをつげたい」という止みがたい望みにとらえられた」と、茅盾に対する深い思いを楊之華は書いている。[67]「多余的話」最後で瞿秋白が挙げる再読してもいい本の中に、魯迅「阿Q正伝」とともに茅盾の「動揺」が挙げられているのも頷ける。『北斗』誌は、瞿秋白にとって大事な雑誌であったのだが、とりわけこの第二期は個人的にも特別な意味があったと考えられるのである。もちろん、その中心的意味を構成するのは「豆腐阿姐」である。

さらに「豆腐阿姐」の作品成立過程と雑誌への掲載に至る経緯を見ておきたい。

陳福康・丁言模『楊之華評伝』は、「豆腐阿姐」には、瞿秋白の援助のもとで楊之華自身が翻訳したソ連作家、セラフィモビッチの小説『一日の仕事〔一天的工作〕』と『転轍夫〔岔道夫〕』からの影響が見られ、似通った描写すらあると指摘している。[68]『瞿秋白年譜詳編』の一九三二年の三月三十日の条には、この日、瞿秋白は楊之華の小説訳稿『一日の仕事』と『転轍夫』を手直しし、「訳者後記」を書いたとあり、『魯迅全集』第十八巻「魯迅生平著訳簡表」同年九月十八日の条に拠れば、魯迅は「文尹（楊之華）と共訳のソ連短編小説集『一日の仕事』のために「前記」を書く。翌年〔一九三三年〕[69]三月、上海良友図書印刷公司から出版された『良友文学叢書』の一冊に入れられた」とある。魯迅と瞿秋白の最初の会見は一九三二年の夏から秋頃という現在の定説に従えば、[70] 魯迅が「『一

日の仕事』前記」を書くのは、瞿秋白・楊之華夫妻と直接会って、面識ができたことが一つの要因となったと考えられる。

さて、まだ瞿秋白・楊之華夫妻が魯迅と会見する以前、一九三二年の一・二八上海事変を受けて、楊之華は「豆腐阿姐」を書くわけだが、楊之華『回憶秋白』（人民文学出版社、一九八四年）の十一「革命友誼」に拠れば、瞿秋白は楊之華の「豆腐阿姐」の原稿を読むと、魯迅に見てもらおうと提案し、躊躇する楊之華を「大先生〔魯迅は三人兄弟の長男だったため親族やその周辺ではこう呼ばれていた〕は、喜んで人助けしてくれるんだよ、特に書き始めたばかりの若者にはね」[71]と説得し、実際、同年三月末から四月初め頃魯迅に原稿を送って手直しを依頼したのであった[72]。魯迅は瞿秋白の期待通り、丁寧に誤字を直して綺麗に書き改めて原稿を返送してくれたと楊之華は回想する。「誤字」だけ直したということはまずあり得ず、魯迅は当然それなりに手を入れたはずである。そして、「豆腐阿姐」は楊之華（あるいは後述の通り瞿秋白・楊之華）の筆名、文尹に「口」を加えて改名した「文君」の筆名で『北斗』に掲載されるに到るのである。筆名は魯迅の提案か、瞿秋白・楊之華夫妻の諧謔表現かはわからないが、「文尹」に魯迅が「口を挟んだ」とも読めるであろう。

ところで、『魯迅日記』にも何度か出てくるこの「文尹」という筆名について、馬蹄疾は「文尹は瞿秋白か楊之華か〔文尹是瞿秋白還是楊之華〕」（『社会科学輯刊』一九八一年第一期）で、一九三四年一月に瞿秋白が上海から江西根拠地に向かう前は、多くの場合「文尹」は瞿秋白を指し、その後は楊之華を指すと一般的には考えられているが、少なくとも『魯迅日記』一九三二年九月十四日「文尹夫婦来る。食事に引き留める〔文尹夫婦来，留之飯〕」、同二十五日「文尹の小説原稿を校閲し、午後、終わる〔閲文尹小説稿，下午畢〕」、十一月四日「『一日の仕事』を良友公司に渡し、出版に付す。昼すぎ、印税二百四十元受けとり、六十元を文尹に分け与える。〔以≪一天的工

作》帰良友公司出版，午後收版税泉二百四十，分与文尹六十」」の条に出てくる「文尹」は瞿秋白であって楊之華でないと確定できると主張した。

一方、陳福康・丁言模はさらに考証を進め、一九三二年九月十四日の「文尹夫婦」は、文尹＝瞿秋白と見て、「瞿秋白夫妻」と解すべきだとする馬蹄疾に対し、そもそも「文尹夫婦」という表現自体が瞿秋白・楊之華二人を指すと見るべきだとし、二十五日の「閲文尹小説稿，下午畢」も魯迅は楊之華の訳稿を瞿秋白が細かく手直ししていることを見て取り、「文尹」を、瞿秋白・楊之華二人をあわせた夫妻の筆名と解釈していたとする。実際、夫妻も意図して二人合同の筆名として「文尹」を名乗っていたが、それが次第に『魯迅日記』では、文尹＝楊之華へと分離していったと言うのだ。たとえば、瞿秋白が江西に向かう約半年前の『魯迅日記』一九三三年七月五日の「疑公及び文尹の書信、併せて原稿一編を受け取る〔得疑公及文尹信，併文稿一本〕」では、疑公が瞿秋白を指すことは魯迅が瞿秋白のために書いた対聯「人生得一知己足矣、斯世当以同懐視之」の記載から明らかな以上、すでにここでの「文尹」は楊之華を指す以外考えられないことを例示している。[73] 陳・丁説の考証がより妥当だと評価できる。

「文尹」が瞿秋白・楊之華夫妻の両者を指すとすれば、「文君」は夫妻に魯迅を加えた筆名と考えることすらでき、それは三人の協力で「豆腐阿姐」が成立したことを端的に示していることになる。

さらに陳・丁は、「豆腐阿姐」は瞿秋白のこの時期の「中国の革命文学とプロレタリア文学は疑いなく、この革命戦争つまり、帝国主義に反対し、中国地主階級に反対する戦争を助けるものでなければならない」（瞿秋白「上海戦争と上海文学〔上海戦争和上海文学〕」一九三二年三月作。『瞿秋白文集　文学編』第三巻所収）という政治見解を指導思想とし、政治任務を負いつつ書かれたものであるとも指摘している。

つまり、「豆腐阿姐」は瞿秋白最愛の妻が、夫の政治的見解を背負って書き、瞿秋白と魯迅の協力によって、世

に出た作品であり、その掲載誌は、瞿秋白が最期に当たって、もっとも「告別」を叙したかった人々が寄稿している一期であったのだ。「中国の豆腐も非常にうまいものだ、世界一だ（中国的豆腐也是很好喫的東西，世界第一）」の原文を見るとき、「豆腐阿姐」のテキスト中、主人公のニックネームの由来を説明する部分に「喫豆腐」という表現があったことも想起される。「豆腐阿姐」は瞿秋白にとって、その生を終えるときに自然と思い出されるもっとも大事な思い出であり、そしてなんといっても「豆腐阿姐」に擬せられる楊之華のことを世界一だ、愛しているといいたかったのであろう。[74]「告別」中、これより少し前の「私は何に心が残るのだろう？　自分のもっとも親しい人にだ」という、楊之華に対する瞿秋白の思いが「豆腐」と結びつくとしたらこう考えるほかにないのではないか。[75]楊之華と魯迅はこれを読めば、すぐに瞿秋白の最後のメッセージを理解したはずである。瞿秋白は「中国の豆腐」に託して、第一に、中国の美しき娘「豆腐阿姐」＝楊之華に、次いで魯迅にも「告別」したのである。繰り返しになるが、「豆腐阿姐」は楊之華・瞿秋白夫妻と魯迅による三人の共作だったのである。瞿秋白最後の書信は、看守の勧めで、郭沫若に宛てられたものを除けば、楊之華（及びその親族）と魯迅（及び三弟周建人）宛だったことも瞿秋白にとってもっとも親しい人が誰であったのかを物語っている。おそらく、この「告別」の意味は丁玲、馮雪峰、茅盾らにもすぐに理解されたに違いない。

では魯迅はなぜ、鹿地亘に「豆腐」及び「多余的話」全体について、「そんなことを瞿秋白がいう筈はない」と言下に否定したのか。楊之華はなぜ「多余的話」偽造・改竄説を一貫して採ったのか。

魯迅は生前、『社会新聞』掲載の「多余的話」の三章しか見ていなかったという前提で述べるが、多くの論者が言うように、これは魯迅が、「多余的話」が国民党の宣伝に利用されていること、さらに中共内に起こりうる瞿秋白の転向批判という事態から瞿秋白を（楊之華を含めて）守りたかったからであろう。『社会新聞』のような国民

党系メディアがすでに「多余的話」を反共宣伝に利用している中、魯迅はこれを瞿秋白の文章だとは政治的にも認めるわけにはいかなかったのである。

実際のところ、拷問も甘言・誘導もある逮捕・拘禁下で本心をそのまま書けるはずがなかった。瞿秋白は伝えるべきメッセージがあれば、国民党が外部に伝わることを容認するような文章にして、その内部に真意を込めるほかなく、転向の書とすれすれの表現も避けられなかった。その意味で「多余的話」の読解は瞿秋白の立場に立ち、その心情を知悉した近親者にしてはじめて可能であった。その一人魯迅には「多余的話」は瞿秋白が書いたものだとわかっていた違いない。楊之華の『回憶秋白』の「十一　革命友誼」や、許広平の『魯迅回憶録』の「瞿秋白と魯迅〔瞿秋白与魯迅〕」からもわかるように、瞿秋白と魯迅は一九三二年後半から一九三四年初まで、親しく交わり、夜を徹して語り合ってもいる。瞿秋白は心の内を魯迅には伝えていただろう。魯迅が瞿秋白に送った対聯「人生得一知己足矣、斯世当以同懐視之」に端的なように、二人は肝胆相照らす仲だったが、それはともに旧世代に属する、いわば滅び行く側の人間だという認識においても共通していた[76]。「多余的話」の「歴史の誤解」「文人」「告別」のような内容は、瞿秋白が魯迅に語っていたことと矛盾がないことを、魯迅は理解したはずだ。

また、野澤俊敬は、文革期のもので、瞿秋白否定に著しく傾く文章中でのことながら、周建人のこんな証言を紹介している。瞿秋白は自分が「政治をやるのは、犬が畑を耕すようなもの」だ、つまり、できもしないことを無理してやっていると、魯迅に語ったというのだ[77]。こうした自己認識、感覚はまさしく、「歴史の誤解」、さらには「多余的話」全体を貫く通奏低音である。これに対して魯迅が瞿秋白に返した言葉を周建人は次のように紹介している。「私〔魯迅〕に言うのはいいが、他の人には言ってはいけない、まずい影響がでる〔你対我説可以，不要再対別人講了，影響不好[78]〕」と。いかにも魯迅らしい言ではある。自分には瞿秋白の言葉が理解できるが、他の人たちから

は誤解を受けるだろうと魯迅は心配していたのである。「魯迅を語る」での魯迅の「多余的話」偽造説主張の理由もこの反応と軌を一にしている。

ところで、瞿秋白は一九三五年六月の『国聞週報』掲載の李克長のインタビュー「瞿秋白訪問記」で「魯迅、郭沫若、丁玲などと共産党との関係はどのようなものか」と聞かれ、魯迅は非党員で「同伴者にすぎない」と答え、すでに日本で亡命生活を送る郭沫若は、妻の要求で安全のために、中共「脱党」を党に申請し、瑞金のソヴィエト中央はこれを承認したとし、丁玲は「ロマンチックな自由主義者」で夫の胡也頻が国民党に殺害された後、一九三三年に急に入党を求めたと答えている。

魯迅についての瞿秋白の回答の意図は明瞭で、魯迅と共産党との関係をできるだけ稀薄化して魯迅を守ろうとしたのであるが[79]、一方では魯迅との交友を通じて、魯迅自身が少なくともある時期「同伴者」を自認していたことを知っていたはずだから、単に嘘を言っているという意識を持つこともなかったろう。魯迅には、この瞿秋白の魯迅＝同伴者規定が二重の意味で理解できたはずだ。魯迅を中共から引き離し、国民党の弾圧から守るため、また、魯迅自身の自己規定である旧社会から来た人間という、瞿秋白とも共有する意識に反しないという意味で。瞿秋白の「『魯迅雑感選集』序言」が言う、魯迅は「進化論からマルクス主義へ」進んだという有名な定式は、必ずしも魯迅の同伴者という自己規定に全面的に抵触するものではあるまい。

郭沫若「脱党」の真相は、竇応泰「郭沫若、茅盾、丁玲の党籍と在党年数〔郭沫若、茅盾、丁玲的党籍和党齢〕」に拠れば[80]、実際は中共中央が郭沫若に一九二八年の日本行きを命じ、周恩来が党籍保留を郭沫若に告げていたが、事情を知らない一般党員は郭沫若が脱党して日本に行ったものと思っていたという。瞿秋白は当然、周恩来らから真相を知らされていたはずだが、上記のような回答が無難かつ安全だったのである。

もう一人の丁玲は一九三三年五月に国民党に逮捕され、一時は死亡説まであったが、この時期、南京で軟禁状態にあり、微妙な境遇にあった。『丁玲年譜長編』[81]に拠れば、丁玲は軟禁期間中の一九三四年五月、左聯メンバーで、魯迅とも交流のある張天翼と南京で偶然出会って話しており、瞿秋白は何らかのルートでこのときの丁玲の動静（生存）を知っていたものと思われる。さて、ここで瞿秋白が丁玲は一九三三年に急に共産党入党を希望したというのは嘘で、同年譜（七九頁）に拠れば、すでに瞿秋白立ち会いのもと、一九三二年に入党している。おそらく、丁玲は共産党員ではないとの直接的な言い訳が通じない状況とみて、質問をはぐらかし、入党動機がいかにも一時の激情に駆られたものに過ぎないと描いて、できるだけ丁玲を守ろうとしたと考えられる。

その他、このインタビューでは楊之華の行方についても聞かれているが、前年六月来、音信がない、逮捕されたとも、郷里に戻ったともいうが、わからないと曖昧に答えている[82]。

瞿秋白は転向したり、敵に同志を売ったりしていないこと、実際には極力彼らを守ろうとしていたことは、それぞれの当事者が読めば、瞭然なのである[83]。

魯迅は上述のようにこの李克長のインタビューは知っており、「多余的話」の三章を読んでいたはずだが、魯迅にとって瞿秋白が非転向を貫いたことは明白だった。というのは鹿地亘の「魯迅と語る」は、魯迅の言葉として、転向の定義を記しているからだ。魯迅曰く「中国作家の転向は日本の場合と違う。……〔ママ〕日本では政治に関係しなくなることを転向というのでしょう。だから作家は転向しても文学が出来る。中国では、それは出来ない。南京政府のために働くことを転向というのです[84]」と。瞿秋白が銃殺されたということは国民党のために働くことを拒否したからにほかならない。魯迅の転向の定義に鑑みれば、瞿秋白が転向したなどということはあり得ないのである（実際、国民党の転向強要の専門家集団が六月初め頃から処刑直前まで、瞿秋白に対して執拗に投降を働きかけ

たのだが、瞿秋白はきっぱりとこれを拒否したことが後にわかっている[85]。これに加えて、瞿秋白が『多余的話』に託した主要な意図が、楊之華、魯迅への告別の挨拶であるとすれば、それを当事者たちは理解し、受け止めたのであり、王明路線への批判なども、楊之華、魯迅をはじめ党内の然るべき人にも伝わったであろうから、「多余的話」は国民党の偽造あるいは改竄だとしておくほうが、国民党の反共宣伝と中共内に起こりうる誤解に基づく「転向」批判とから瞿秋白を守るためには無難だったのである。

かくして、場合によっては曲筆も厭わず[86]、政治的判断もできた[87]魯迅は鹿地に「そんなことを瞿秋白がいう筈はない」と否定し、中共党員、楊之華もこれに準じたと考えるほかない。二人の選択が正しかったことはその後、半世紀近くの歴史が証明している。

さらに蛇足ながら、魯迅が「多余的話」を本物と知っていたに違いない傍証を二件記して本論を終える。

まず、一九二〇年代後半、鄭超麟から瞿秋白の「追っかけ」と見なされ[88]、一九二九年の作品「韋護〔瞿秋白の別名〕」で、親友王剣紅と瞿秋白の恋愛・結婚を描いたことまである、瞿秋白と浅からぬ縁の丁玲は、一九八〇年に書いた「我所認識的瞿秋白同志—回憶与随想」で、延安で初めて「多余的話」を読んだとき、「この文章は彼〔瞿秋白〕自身が書いたものだと確信した」と書いている。これは文革が終わり、瞿秋白復権問題が論議されている最中の回想であるが、実は一九三九年にすでに丁玲は同様の認識を香港紙に発表していた。同年十一月二七日付『星島日報』コラム「星座」は丁玲署名の「友人と瞿秋白を語る〔与友人論瞿秋白〕」という短文を掲載しており、丁玲は『逸経』で「多余的話」を読んだとした上で、「多余的話」が「瞿秋白を貶めるものだと考え、デタラメだという人がいる。私はだが、そうは思わない。大体は秋白が書いたものだと思う」と書いた。その理由としては、要するに、瞿秋白は旧式の読書人の出身で、共産党の指導者となっても「多余的話」に描かれたような矛盾を抱えて

いたことを丁玲は知っていたからだという。丁玲には瞿秋白を批判したり、貶めようとしたりする意図は見えないが、最後では「秋白がこんな『余計な事〔多余的話〕』さえ言わず、誰にも理解されない心情など犠牲にできていたなら、もっとよかったのに」とも述べている。丁玲のこの記事の執筆時期は確定できないが、『逸経』の「多余的話」連載（一九三七年三月～四月）から『星島日報』掲載前までの間ということになる。しかし発表当時、丁玲は国民党の逮捕からようやくにして延安に逃れ、中共党員作家として優待されていたわけだから、なぜ党の公式見解と異なることを香港紙に書いたのかは、その原稿の送付ルートなども含め、さらに検証すべきことがらである。丁玲のこの記事は当初から「多余的話」偽造・改竄説で瞿秋白を守ろうとしていた魯迅（このときすでに亡くなっていたが、丁玲にはいろいろな面で「恩人」でもある）や楊之華には不都合であったに違いない。瞿秋白をめぐる三人の女性（王剣虹、丁玲、楊之華）の複雑な関係、丁玲の瞿秋白に対する思いが執筆の背景に窺えるのであるが、さらにもう一つ考えておくべきは、瞿秋白が「多余的話」とともに残したとされる「未成稿目録」に『痕跡』「10. 丁玲と彼〔丁玲与他〕」という項目があることだ。「未成稿目録」は瞿秋白が書き残そうとした「文学作品の読書メモや自伝的作品のタイトル」[89]の目録であり、『痕跡』とは自伝的作品に予定していたタイトルである。「未成稿目録」全体が明らかになるのは、「多余的話」の手書きの写本が一九七九年に中央档案館で国民政府档案の中から発見されてからのことであるが、陳正醍が指摘している通り[90]、一九三七年七月に『逸経』に掲載された趙庸夫「関於瞿秋白之種種」には、「未成稿目録」についての言及があり、同記事には「丁玲と彼」と「青の長衣〔藍布袍子〕」の二編のみ編名が記されていたのである。丁玲は延安で「多余的話」とほぼ同時にこの記事を見て、個人史的なことに発するのか、政治的な配慮からか、はたまたその両方からかも知れないが、「多余的話」について何か書かざるを得ない衝動に駆られたのであろうか[91]。

ついで、鄭超麟の間接的な証言である。鄭超麟は回憶録[92]でこう書いている。

秋白の「龔マニア」ぶりも私と同じだった。定公〔龔自珍は定盦と号した〕の詩を秋白は私よりもよく知っていた。その日、秋白は私に、中国の旧詩、とりわけ定公の詩は意味が漠としていて、我々の思想を表現するのに打ってつけだと言った。秋白が農民暴動を読んだ詩を一首集句したが、その中にはこういう一句があったのを覚えている。「忽ち聞く、大地に獅子の吼ゆるを」。のちに秋白が福建で国民党に逮捕され、銃殺される数日前やはり定公の詩から数首集句しているが、その中で「莫抛心力貿才名（心力を抛って才名を貿むることなかれ）」を「莫抛心力作英雄（心力を抛って英雄となることなかれ）」と書き換えている。

この龔自珍の絶句から一句借用して作った「完渓沙」は、一の（4）で書いたとおり、一九三五年七月一日付『中央日報』の記事「瞿匪秋白　在長汀槍決詳情」及び七月八日付『国聞周報』の李克長「瞿秋白訪問記」で紹介されている。陳正醍は鄭超麟が瞿秋白の「完渓沙」の一句「莫抛心力作英雄」で「莫」とするのは誤りで（『鄭超麟回憶録』日本語版も同じく誤り）瞿秋白の句では「枉〔むだに、の意〕」であると指摘しているがその通りである。[93]

さて、問題は鄭超麟がこの「完渓沙」を瞿秋白の詩だと疑いもなく受け止め、その一句は龔自珍からの借用だと認識している点である。鄭超麟がいつの時点で「完渓沙」を見たのかは明確には書かれていない。しかし、文学好きで瞿秋白とは馬が合った鄭超麟には、一読で瞿秋白の詩だと見抜けたのである。そこから敷衍すれば、この詩と同時期に同環境で書かれた「多余的話」を鄭超麟も早い時期から瞿秋白のものと見ていたことは明らかである。

こうして、瞿秋白ゆかりの丁玲や鄭超麟らに瞿秋白の辞世の文章や詩が、現在では中共自身が認めるように国民党の偽造などではなく、瞿秋白自身のものと認識できたとしたら、魯迅（楊之華も加えて）にそれがわからなかったなどということはまずあり得ないことである。

「完渓沙」の作者、龔自珍について言えば、実は魯迅も「龔マニア」であった。『魯迅全集』に龔自珍の名は見えないが、生前の魯迅を直接知る唐弢は、「『魯迅全集』補遺編後記」（一九四六年執筆）で、一九三八年版『魯迅全集』から漏れた「子供時代〔児時〕」という短文を、「補遺」に拾うに際し、許広平が、（この文章の署名「子明」は魯迅の筆名であるが）瞿秋白はしばしば魯迅の筆名を借用していたこと、かつ、筆致が魯迅とは違うため、これを魯迅の作とすることに疑義を持っていると書くが、それでも唐弢自身これを「補遺」に収録した根拠として、魯迅が一九三四年一月十七日付の黎烈文宛書信で自身の文章だと言っていること、さらに「〔魯迅〕先生は定盦〔龔自珍〕の詩を好み、……この作品〔「子供時代」〕はその詩意から発して……詩意を満たしており、先生でなければこの境地に到ることはできない」ことに求めた。「詩意」とは「子供時代」がエピグラムとして引く龔自珍の詩「猛憶」を言っているのである。[94] ここに到って龔自珍は魯迅、瞿秋白とも交差する。

さらに、松岡俊裕は初期魯迅の旧詩「自題小像」について、この魯迅の詩の承句「風雨如磐闇故園」が、龔自珍の詩「哭洞庭葉青原」の中の「黒雲雁背如磐堕」に似ており、魯迅の翻訳したベルヌの小説『月界旅行』や同じく初期魯迅の代表作「破悪声論」にも「黒雲如磐」の語が現れ、一九一〇年十二月二一日付の許寿裳宛書信でも「風雨如磐」が使われていると指摘している。[95] また当の魯迅の日本留学時代からの親友許寿裳は、魯迅とともに民権保障同盟を担っていた楊杏仏（銓）が一九三三年、国民党特務に暗殺された際、魯迅が作った追悼の旧詩「悼楊銓」を評して「才気縦横、新意に富み、龔自珍と異なるところがない」と、書いていた。[96]

魯迅が瞿秋白の「完渓沙」の一句の出典が龔自珍であることに気づかぬはずがなく、この点からも「多余的話」を瞿秋白の作と十分認識していたと考えるべきなのである。

終わりに

「多余的話」の「豆腐」の謎は、上述の通り、これまで等閑に付されてきた瞿秋白夫人、楊之華の小説「豆腐阿姐」の成立、発表過程を見ることによって解けるのではないかと筆者は考えている。少なくとも蓋然性の高い仮説の提示はできたのではないかと思う。

そして、「豆腐」の謎が解けることによって、魯迅や楊之華が表向き「多余的話」を国民党のよる偽造・改竄だと言いながら、実はそれが瞿秋白の文章であることを当初から知っていたことがわかるのである。

「多余的話」は確かに「赤裸々な自己解剖」の文章であるが、単に「過剰な自意識」のなせる業だと見なすことはできまい。瞿秋白には「辞世」の文章「多余的話」に込めた戦略と戦術があったのである。瞿秋白にとって「自己解剖」の中に楊之華や魯迅その他文学上の同志、及び中共内に残る信頼すべき同志への個人的かつ政治的メッセージを含めることが重要だったのであり、その伝達のために、「自己解剖」の内容や表現は、国民党当局の流通容認のレベルに適合させてあること、また一部は瞿秋白の想定する特定読者にのみ理解可能な工夫が凝らされ、謎が仕掛けられていることに留意しなければならないのだ。

本論で論じきれなかった課題も多い。楊之華には本当に「多余的話」のオリジナル原稿も副本も渡らなかったのか。また、丁玲はなぜ、一九三九年に『星島日報』に「友人と瞿秋白を語る」を載せたのか。周恩来は本当に「多

余的話」のオリジナルを見たことがあるのか、等々。そして、「多余的話」の一言一句には今後もさらなる読解の可能性があるだろう。魯迅研究の見地からだけでなく、党史、丁玲、郭沫若、馮雪峰、茅盾等々に関する個別研究が合流することによって、瞿秋白研究、「多余的話」研究はさらに豊富化されるに違いない。

注

（1）引用文中〔　〕は筆者訳注、（　）は原注を、……は引用者による省略を表す。なお、以後の行論上、「多余的話」はそのまま中国語で表記する。また本論で使用する魯迅のテキストは人民文学出版社、二〇〇五年版『魯迅全集』。その日本語訳は学研版『魯迅全集』に拠るが、一部改変した部分もある。また、日本語文献引用に当たっては旧字体、旧仮名遣いは新字体、新仮名遣いに改めた。

（2）『瞿秋白文集　政治理論編』第七巻収録の当該編「編者注〔編者按〕」は、「『多余的話』は現在に到るまで作者の手稿は未発見である。文章の内容、書かれた事実、文章の風格から見て瞿秋白の執筆である。ただ、国民党当局による改竄箇所の有無については、なお断定しがたいため、「付録」として本巻に収め、研究者の参考に供する」と言う。

（3）初出は国民党中統系メディア『社会新聞』第十二巻第六～八期（一九三五年七、八月）への部分掲載。

（4）肖軍「建国以来瞿秋白研究述評」（『瞿秋白研究』7、学林出版社、一九九五年）は「一九三五年『社会新聞』に初めて「多余的話」が部分的に掲載されて以後、中国共産党は一貫してこれは国民党の偽造だと見なしてきた」（二二一頁）と書く。本文の二の最終部でも触れるが、陳正醍は「瞿秋白『絶筆詩』考」（『中央大学紀要　言語・文学・語学』通巻第二二九号、二〇一〇年）の注（3）、（4）で具体的にはこれがパリ刊行の中共機関誌『救国時報』第三七期、一九三六年六月二十日の「瞿烈士風度一瞥　国聞週報記者之『瞿秋白訪問記』」や同紙第一〇六期、一九三七年六月十七日の方林「秋白殉難両周年」に始まると見ている。

（5）鹿地亘「魯迅と語る」（『文藝』一九三六年五月号、改造社）。これについては後述する。

（6）最も端的な例は、新島淳良著「瞿秋白夫人からの手紙」（魯迅研究会編『魯迅研究』第四号、一九五三年八月）に引用された楊之華の言葉である。これについても後述する。

（7）野澤俊敬「瞿秋白の『多余的話』についての覚書」（『北海道大学　言語文化部紀要』4、一九八三年）に拠れば、一九六三年に戚本禹の李秀成批判に端を発した史学界の論争の中で、周恩来は一九六四年前半、瞿秋白の転向を党中央に報告し、瞿秋白問題調査委員会を設置したものの、陸定一、周揚らの妨害で周恩来の提起は認定されなかったが、文革に突入した一九六六年八月、周恩来は瞿秋白を公式に名指しで批判し、「多余的話」は瞿秋白のものと中共に認定されるに到るのである（三六～三七頁）。『周恩来年譜1949-1976』上中下巻（中央文献出版社、一九九七年）には、一九五五年の瞿秋白の安葬儀式を周恩来が主宰したことの記載はあるが、文革期の瞿秋白批判を主導したことは書かれていない。なお、呉基民『煉獄――中国托派的苦難与奮闘〔中国トロツキー派の苦難と奮闘〕』（シンガポール八方文化研究室刊、二〇〇八年）の第二章は一九三〇年及び翌年初の第六期三中全会、四中全会時の周恩来と瞿秋白の関係に触れ、さらに一九四三年、第七回大会準備中の中共中央は「多余的話」を仔細に検討した結果、毛沢東、劉少奇、周恩来、任弼時、康生らも瞿秋白を「烈士」と認定したとする。また、文革期に周恩来がこれを覆したのは、毛沢東の文革発動の意図を汲んで、虚偽を述べざるを得なかったためだと指摘していて興味深い（二一～二九頁）。同書は中共内部事情に関する伝聞、中国トロツキストに対するインタビュー等からなり、復旦大学教授・陳思和の序が付されている。本書の聞き書き的性格からか、出典注が一切ないのは残念である。英訳は以下の書に収められている。*PROPHETS UNARMED : Chinese Trotskyists in Revolution, War, Jail, and the Return from Limbo*. Edited by Gregor Benton, Heymarket Books, Chicago, USA, 2017.
同書初版は Brill Academic Publishers, Leiden, Netherlands, 2015. である。

（8）前掲注（4）の肖軍論文参照。ついでに言えば、一九七六年一月に死去した周恩来は、遺言により火葬の上、遺灰は飛行機から北京、天津、山東の大地に散骨された（『周恩来年譜1949-1976』下巻、七三〇頁）。紅衛兵に瞿秋白の墓を曝かせた（も同然な）周恩来は、将来、自分の墓も曝かれることを危惧したのであろうか。周恩来の弟分で一九七年に死去した、一九八九年の六・四当時の最高実力者、鄧小平の遺灰も空から東シナ海に散骨された（『鄧小平

年譜1975-1997』下巻、中央文献出版社、二〇〇四年、一三七八～九頁）。周、鄧のこの処置は筆者世代にはまだ生々しい記憶として残るところだ。

（9）本論での「多余的話」の邦訳は『中国現代文学選集』第十七巻「記録文学集Ⅲ」（平凡社、一九六三年）所収、伝瞿秋白（作）・丸山昇訳「言わずもがなのこと」に拠ることとする。但し、注（1）の通り、タイトルだけは原文のままとする。「多余」の「余計な」という原義、またそれがロシア文学に精通していた瞿秋白自身の「余計者」意識とも通底していることなどを勘案してのことである。また、最後の一句の原文は「告別了」ではなく「永別了」であり、丸山は他の部分にある「永別了」を「永遠にお別れだ！」と訳しているので、ここは〔永遠に〕を補って引用する。なお、この邦訳の底本は本文後述の『逸経』版テキストであるが、陳正醍が指摘するように、邦訳では解読に重要な手がかりとなるエピグラムが省略されている（後掲注（33）参照）。また、現在通行している『瞿秋白文集　政治理論編』第七巻所収の中央档案館保存の国民政府手書き筆写本と『逸経』版との間には異同があり、後者には若干の脱落がある。校異詳細は『瞿秋白文集』版の注を参照。

（10）参照した日本語の「多余的話」に関する主な先行論文には次のようなものがある。新島淳良「魯迅と瞿秋白」、「瞿秋白夫人からの手紙」（魯迅研究会編『魯迅研究』第四号、一九五三年八月）、「北京で見た瞿秋白批判」（東大東洋文化研究所『東洋文化』44、一九六八年二月）。野澤俊敬「瞿秋白の『多余的話』についての覚書」（『北海道大学　言語文化部紀要』4、一九八三年）。陳正醍「瞿秋白『多余的話』の周辺――「郭沫若あての手紙」を中心に」（『中央大学文学部紀要』通巻第二一四号、二〇〇七年）、「瞿秋白『絶筆詩』考」（同前、二二九号、二〇一〇年）、「瞿秋白の「獄中詩詞」について―（その一）〈浣溪沙〉―（下）」（同前、二四九号、二〇一四年）、「瞿秋白の「獄中詩詞」について―（その二）―〈卜算子〉」（同前、二五四号、二〇一五年）、「民国期の黄仲則再評価と瞿秋白：獄中詞〈浣溪沙〉との関連で」（同前、二五九号、二〇一六年）。井口晃「『余計な事』を読む」（岩波書店『文学』一九七六年四月号）。三木直大「瞿秋白と『余計な話』」（『季節』第六号、一九七八年六月）、「『多余的話』（余計な話）を再論する」（同前第八号、一九七九年九月）。鈴木将久「余計なことば―瞿秋白『多余的話』における「語ること」と「演じること」―」（『中国哲学

研究』13、東大中国哲学研究会、一九九九年十二月）。白井澄世「瞿秋白『多余的話』について――「語り」と「時間」についての試論」（『越境する中国文学』東方書店、二〇一八年、所収）など。なお、これら諸論文が触れない資料に、山本実彦著『支那』（改造社、一九三六年九月）所収の「瞿秋白」がある。本書は一九三六年初春からの中国旅行のルポルタージュ（同書所収、『文藝』同年七月号初出の「上海からSへ」に拠れば、山本はこの年、二月九日に上海に着いたと書いている）、「瞿秋白」で山本は「多余的話」のタイトルにこそ触れないが、その内容に渉り、かつ瞿秋白最後の詩「偶成」を紹介している。おそらく、『申報』一九三五年七月五日の記事「瞿秋白伏法記」が材源ではないかと思われるが、日本でも小池英二（小沢正元）「瞿秋白の最後」（『国際評論』一九三五年十月号。内容は『国聞週報』李克長インタビューの紹介。最後で瞿秋白を「過去及現在に於いて中国左翼論壇の持ち得た最大の理論家」と評価。この記事には鄭超麟の名も出てきて興味深い）が出ているので、山本はこれも参考にしている可能性もある。野澤論文の「注兼『関係資料目録』」等にある通り、進士槇一郎（波多野乾一）が「瞿秋白伝」を『改造』に書くのは、一九三六年八月号でのことであり、山本が「瞿秋白」で『改造』誌掲載の波多野論文を参考にしている可能性はない。さらに山本同書には魯迅との同時期の会見記「魯迅」（『文藝』一九三六年八月号初出）が収録されている点でも注目に値するが、「魯迅」には瞿秋白の死に関する言及はない。また、文革時代に出ていた首都紅代会北京政法学院《政法公社》・首都司法戦線市法院紅色革命造反総部主弁『討瞿戦報』第五・六期合刊、一九六七年六月二六日付には一九四〇年七月刊の大塚令三『中国共産党略史』が「獄中記『多余的話』」を載せているとも書いているが、大塚著の正しい書名は『支那共産党史』上下巻で、東京・生活社刊。確かに上巻第一章「支那共産党略史」第四節「瞿秋白の革命的生涯」の二、三がそれぞれ獄中記「多余的話」（上）（下）である。しかし、上下合わせて八頁のダイジェストであって、全文の翻訳ではない。

（11）瞿秋白は党中央臨時政治局を主宰したが、総書記の肩書きはない。陳鉄健『瞿秋白伝』（上海人民出版社、一九八六年）など参照。本文後出の通り、瞿秋白は一九二五年一月の中共四全大会以降、陳独秀、張国燾、彭述之、蔡和森、瞿秋白からなる中共中央局委員の一人であり、四・一二以前の中共の決定には陳独秀とともに責任ある立場であったことは指摘しておかなければならない。なお、国民革命期の瞿秋白の中国革命観、戦略・戦術論についての詳細な分

析は江田憲治「瞿秋白と国民革命」（『中国国民革命の研究』京都大学人文科学研究所、一九九二年、所収）参照。江田による、トロツキーの永続革命論にも連接し、スターリニズムの枠に収まりきらぬ瞿秋白革命論の分析と、にもかかわらず意識的であれ無意識的であれ、スターリニズムの政治的磁場で、それを表現、体現しなければならなかった瞿秋白の悲劇性の指摘は秀逸である。筆者の感想を付言すれば、毛沢東はある意味で瞿秋白理論の後継者である。「自覚なき永続革命論者」（王凡西の毛沢東評言）という点においても。王明らが瞿秋白を「半トロツキスト」と非難したことも、後年、ソ連共産党や日本におけるその追随者たちが毛沢東を「トロツキスト」と非難したのもあながち的外れとも言えないのだ。無論、毛沢東にとって内実は問うまでもなく、トロツキスト＝反革命であったのだが。

（12）福本勝清『中国革命の挽歌』（亜紀書房、一九九二年）六五頁。

（13）この対聯の典拠については王凡西著長堀訳「胡風遺著読後感」（『慶應義塾大学日吉紀要　言語・文化・コミュニケーション』No.37、二〇〇六年十月）の注（16）を参照のこと。魯迅の作ではない。なお、この詩の魯迅、瞿秋白間の贈答については実はもう一幕あるのだが、ここでは省略する。朱嘉棟「楊之華同志訪問記」（上海魯迅紀念館編『紀念与研究』第七輯、一九八五年）参照。

（14）拙著『魯迅とトロツキー』（平凡社、二〇一一年）三二四～三二五頁の注（22）参照。なお、当該注で言うのは、瞿秋白、馮雪峰が毛沢東に魯迅の「政治的」重要性についても教えたということである。藤井省三『魯迅「故郷」の読書史』（創文社、一九九七年）は、毛沢東の湖南第一師範附属小学校校長時代の生徒でのちに作家、教師となった許志行の一九二一年当時の回想に、毛沢東が発表間もない魯迅の小説「故郷」を生徒に「熟読させ書き写させたことを覚えている」という証言があると指摘している。毛沢東は初期から魯迅の小説には注目していたことになる。許志行については、王凡西著長堀訳・解題「宋雲彬と許志行を思う」（『慶應義塾大学日吉紀要　言語・文化・コミュニケーション』No.39、二〇〇七年十二月）参照。

（15）王彬彬「瞿秋白：不得不走、不得不留与不得不死」『鍾山』二〇〇八年三期。後掲注（16）の秦摩亜「瞿秋白被害，誰之罪？」に拠れば、瞿秋白には国民党から銀元二万元の賞金が懸けられていた。

（16）部分的反論は王竜「也談瞿秋白為何没有長征」（『炎黄春秋』二〇一一年十期）、全面的反論は秦摩亜「瞿秋白被害，

誰之罪？」（同前十二期）。博古が結果責任を認めていたと書くのは後者。

（17）劉小中・丁言模編著『瞿秋白年譜詳編』（中央文献出版社、二〇〇八年）四三九頁。

（18）陳正醍「瞿秋白『多余的話』的周辺――「郭沫若あての手紙」を中心に」に拠れば、この「供述書」については陳鉄健「『多余的話』的両段佚文」（陳鉄健ほか編『瞿秋白研究文選』天津人民出版社、一九八四年、所収）が触れるものの、全文は依然未公開であるという。その後、「導読：書生革命者的悲劇情懐――外曲内直燭照心霊的『多余的話』」（『20世紀中国人的精神生活叢書　多余的話』、貴州教育出版社、二〇一四年、所収。ここではその十頁）で陳鉄健は「供述書」の一部を引用しているが、そこで瞿秋白は「声をそろえ、付和雷同して「共匪」を罵るわけにはいかないし、格好をつけて共産党の烈士面をするはずもない。というのはどっちにしても同じ死〔が待つだけ〕だからだ。どうして苦しんで自らを欺き、人を欺くことがあろうか〔何苦自欺欺人呢？〕」と言っているが、「何苦」はもちろん地の文として読めるのだが、実のところこれは『魯迅全集』にもよく現れる瞿秋白の筆名である。とすれば、「私は自らを騙し〔心にもないことも言いつつ、あるいは嘘を言いつつ〕、人〔国民党〕を騙しているのだ」とも読めるのである。瞿秋白の獄中の言葉は「詩詞」も「供述書」も「多余的話」も、すべて行間や行中に隠された意味があると考える必要がある（なお、江蘇文芸出版社、名人自伝叢書の『瞿秋白自伝』、一九九六年、には現在見られる最大限のものと思われる「供詞〔供述書〕」がまとまって載っている）。

（19）前掲注（15）、（16）と関連する。

（20）前掲注（18）の陳正醍論文は『多余的話』と「郭沫若あての手紙」がそれぞれ「対象とする「読み手」に伝えられるまでにどのような障害が存在し得るかを考慮して書かれたものなのかに注意を払わなければならない……『多余的話』の場合、それが特定の受取人に安全に届けられるためには、もしくは内容も表現も原型を保ったまま一般の読み手に対して発表されるためには、それなりの工夫が必要であったはずだ」（一九九頁）と書く。蓋しその通りである。

（21）瞿秋白「中央委員会への書信――五中全会招集の意義と左右日和見主義に反対する意義〔給中央委員会的信――五中全会招集的意義与反左右傾機会主義的意義〕」一九三三年十二月十日付。『瞿秋白文集　政治理論編』第七巻、六五四～六頁。

（22）たとえば妻・楊之華は上海党中央局組織部秘書（組織部副部長に相当）であり、上海地下党の交通工作（つまり、秘密の通信や連絡）を担当していた（陳福康・丁言模『楊之華評伝』、上海社会科学院出版社、二〇〇五年、の「附録　楊之華年譜」、四九一頁）。魯迅も中共のフロント組織、左聯の常務委員であった。

（23）前掲注（10）の鈴木将久「余計なことば―瞿秋白『多余的話』における「語ること」と「演じること」―」は魯迅が瞿秋白の翻訳遺稿集『海上述林』を編んだ際、「この本は、中国でかつてこれほど精美なものが出版されたことはない。「何苦」―瞿秋白の別名―を記念したものであるが、実は私を記念したものでもある」と語ったという許広平の証言を引いている（同編の注（44）に拠れば、出典は景宋（許広平の筆名）「関於魯迅先生的病中日記」（『申報・自由談』一九三八年十月十九日）。これは、魯迅が瞿秋白のうちに自己を見いだしていたことを意味する。魯迅はテキストには残してはいないが、一九三一年に増田渉に語ったように、清末の革命運動での挫折から「革命家失格」という意識を持ち、当時の共産主義運動との関係で言えば、自分は「同伴者」であると考えていたことは明らかである（拙著『魯迅とトロツキー』平凡社、二〇一一年、所収「魯迅と富田事件」参照。『海上述林』の装幀については同章の注（3）参照）。近似の意識を赫赫たる中共指導者瞿秋白も有していたこと、あるいはそうした自己解剖の鋭さ、正直さに対して共感したからこそ、瞿秋白を記念することが魯迅にとって自身をも記念することになるのではないか。

（24）前掲注（10）の陳正醍「瞿秋白の「獄中詩詞」について―（その一）〈浣溪沙〉―（下）」二五六～二五七頁。

（25）ここは、陳独秀最晩年の言論を連想する。陳独秀は「鄭学稼への書信」（一九四一年一二月二三日付）でレーニン、トロツキーの説は中国には適合しないとまで書いたが、絶筆論文「被抑圧民族の前途」（一九四二年五月十三日付）では、民族問題の解決には帝国主義打倒、国際社会主義の実現に拠るほかないと書き、マルクス主義堅持を鮮明にした。二編はともに、江田憲治・長堀編訳『陳独秀文選』第三巻（平凡社、東洋文庫、二〇一七年）所収。

（26）王凡西著矢吹晋訳『中国トロツキスト回想録』（柘植書房、一九七九年）七四～七五頁。また『近代中国人名辞典　修訂版』（霞山会、二〇一八年）の「瞿秋白」の条（中村楼蘭執筆）に拠れば、中山大学では、スターリン派・トロツキー派の対立とは別の中共内派閥対立もあった。

（27）周建人は「我所知道的瞿秋白同志」（『憶秋白』、人民文学出版社、一九八一年、所収）で一九三二年に、魯迅の家で

瞿秋白に再会したとき、「病みつかれた顔で、むくみ、血色も悪く、元気もなかった」ので、瞿秋白とはわからなかったと述べている（一八〇頁）。

（28）馮雪峰は「一九三六年の周揚らの行動及び魯迅が『民族革命戦争の大衆文学』というスローガンを提出する経過について〔有関一九三六年周揚等人的行動以及魯迅提出〝民族革命戦争的大衆文学〟口号的経過〕」の中で、「全国解放後」、瞿秋白の未亡人楊之華が、魯迅から一九三四年から一九三五年の間に「〔周揚のような〕党員を君たちはどうして追い出さないんだ〔像這様的党員、你們為什麼不清出去〕」という意味の言葉を言われたことがあると馮に語ったと述べている。（『馮雪峰文集』第四巻、人民文学出版社、一九八五年、五一二頁。初出は『新文学史料』第二輯、人民文学出版社、一九七九年二月）。この言葉は「告別」中の「こういう人間〔瞿秋白自身を指す〕を、どうしてまだ除名しないのだろうか〔這様的人、如何還不要開除呢！〕」（『瞿秋白文集』第七巻、七一九頁）を想起させる。楊之華が魯迅から聞いた時期がいつかが問題となるが、瞿秋白が一九三四年初に瑞金に旅立つ以前、あるいは、瑞金にいた一九三四年いっぱいまでのことであれば、瞿秋白は楊之華から魯迅のこの言葉を直接あるいは間接的に聞いたであろうし、一九三五年六月の瞿秋白の遭難以後、「多余的話」を『社会新聞』で魯迅が見たあとであれば、魯迅は瞿秋白の言葉を引用して楊之華に中共への不満を語った可能性がある。後者はいかに魯迅とはいえ、辛辣すぎるし、瞿秋白遭難以後、楊之華が魯迅に直接会った記録も管見の限り見えない。もし、瞿秋白、魯迅両者の言葉遣いが偶然の一致でないとすれば、前者の可能性が高い。瞿秋白は魯迅が言うところの周揚と同様、自分も党員の資格がないと自己否定の論理として用いつつ、実は王明らの自分に対する仕打ちに抗議しているということか。ただし、これはあくまで「偶然の一致でないならば」という仮定の話にすぎない。なお、陳鉄健「導読：書生革命者的悲劇情懐――外曲内直燭照心霊的『多余的話』」は、一九三一～一九三三年頃のこと、中共上海中央局の責任者で一九三四年に転向した李竹声が瞿秋白を罵って「おまえのような者は、党外にたたき出すよりない〔像你這様的人、只有一棍子敲出党外去〕」と言ったという。あるいは瞿秋白はこれを当てこすって「多余的話」に採用したのだろうか。同書四頁。

（29）瞿秋白最後の「多余的話」、獄中詩詞、書信などのテキスト問題、伝播問題、さらに瞿秋白の逮捕、処刑報道について、詳細かつ厳密な考証を行っているのは前掲注（10）の陳正醒の一連の論文である（「獄中詩詞」の語は「瞿秋白

の「獄中詩詞」について（その一）―浣溪沙―（上）」に拠る）。さらに同注に挙げた野澤論文も詳細なクロニクル風の「関連資料目録」が付いていて便利である。鈴木論文、白井論文にもテキスト読解、周辺事実問題の考証がある。ここではこれら諸論文、特に陳論文を参考としている。

(30) 注（9）でも書いた通り、現在『瞿秋白文集　政治理論』第七巻収録の「多余的話」のテキストは、新中国で中央档案館に保管されていた国民政府档案の筆写本を底本としており、『逸経』テキストにある若干の脱落、異同について注記している。『社会新聞』の三章のテキストと文集版テキストの異同を確認したが、本論の行論上、問題となるほどの異同はないと考えていい。

(31) 前掲注（10）に挙げた鈴木論文参照（一〇二頁）。追記：なお、本論初稿完成後に見た姚錫佩「魯迅読『多余的話』之後」（『瞿秋白在汀州』厦門大学出版社、一九九二年、所収。五七～六六頁）は、魯迅所蔵書の中に一九三二～一九三五年の『社会新聞』が二十四号あり、「多余的話」の載った号はないものの、魯迅は間違いなく同誌を見ていただろうとする。また、注（10）上述の「瞿秋白伏法記」の載った七月五日付『申報』を魯迅は所蔵していたと言う（これによって、本文後掲の、魯迅が瞿秋白の死を知った時期に関する考証は、やや意味を減ずるのだが、論文構成上の整合性を保つため、そのままとした）。さらに姚が、魯迅と瞿秋白の関係からして、魯迅は当時もっともよく「多余的話」を理解した人物だとしているのには同感である。

(32) 一例を挙げれば少離「魯迅とトロツキー派（魯迅与托派）」（『社会新聞』一九三四年四月六日）。

(33) 『逸経』版、『瞿秋白文集』版にある「多余的話」のエピグラム、『詩経』「黍離」の二句「知我者、謂我心憂、不知我者、謂我何求」は、陳正醍「瞿秋白「多余的話」の周辺」の注（2）が言うように、瞿秋白の「多余的話」執筆意図を考える上で重要な意味を持つのであるが、『逸経』版を魯迅は見ていないことが本論の前提なので、ここでは魯迅との関係では特に触れず、解釈のみ略述するに止める。高田真治『漢詩大系1　詩経　上』（集英社、一九六六年）の訳は以下の通り。「わたしを知る者は　心に憂いを抱くからであるというであろう　わたしを知ってくれぬ人はわたしが何か探しもとめているのであるというであろう」。この解釈に基づいて瞿秋白の意図を忖度すれば、自分のことを理解してくれる人は、「多余的話」の執筆理由を、心配があるからだとわかってくれるだろうが、私のことを

知らない人は何かを探し求めていると考えるだろう、ということになる。しかし、もし、後半部を疑問ないし反語で読めれば、「何をもとめようとしているのか」、つまり、求めているものがわからない、あるいは何もあるはずがない、ということになる。要するに、わかる人にはわかるだろうから、それでいい。わからない人は相手にせず、理解を求めないということではないか。「多余的話」は少数の近親者へのメッセージだという意味に解せよう。なお、吉川幸次郎注『中国詩人選集2　詩経国風』下巻（岩波書店、一九五八年）は「わたしの気もちを知るひとは、わたしの胸のなやみを知る。わたしの気もちを知らぬひとは、わたしは何をものほしげにきょろきょろしているのかという」と訳している。

(34) 陳正醍論文が指摘する通りこの記事は「憶」を「億」と誤植している。

(35) 四首を参考として掲げる。「偶成」：夕陽明滅乱山中　落葉寒泉聴不窮。已忍伶俜十年事　心持半偈万縁空。「完渓沙」：廿載浮沈万事空　年華似水水流東　枉抛心力作英雄。湖海棲遅芳草夢　江城辜負落花風　黄昏已近夕陽紅。「夢回（口占）」：山城細雨作春寒　料峭孤衾旧夢残。何事万縁倶寂後　偏留綺思繞雲山。「（獄中）憶内（集唐人句）」夜思千重恋旧遊　他生未卜此生休。行人莫問当年事　海燕飛時独倚楼。テキストは周紅興『瞿秋白詩歌浅釈』（広西人民出版社、一九八一年）による。（　）は本書では採られていない字句。これら「獄中詩詞」のテキスト問題、解釈については、陳正醍論文、及び本書参照のこと。なお、最後の「憶内」は夫人・楊之華を思って集句されていることは、周紅興が注で述べる通り（同書二一一頁）。本文後述の内容の根拠ともなる。

(36) 周永祥『瞿秋白年譜新編』（学林出版社、一九九二年）は従来の定説、二月二四日逮捕説を退け、二月二六日説を採る（同書三八四頁、注（2））。なお『魯迅全集』二〇〇五年版注は瞿秋白の逮捕を二月二三日としている。『瞿秋白文集』版の「多余的話」は、「多余的話」国民政府書写本とともに発見された、『逸経』版にはない瞿秋白「記憶中的日期」を附録とするが、これに拠ると、瞿秋白自身は逮捕を二月二三日と書いている。この「記憶中的日期」にも注意が必要で、瞿秋白は何らかのメッセージをこれに込めているように思われる。たとえば、前妻、王剣虹との結婚と、彼女の死については、「一九二四　一月　七月」と「月」のみの記載だが、楊之華との結婚については「一九二四年十一月七日」と「日」まで記載がある。この日は、ロシア革命記念日でもあったのだが、「日」まで記載がある事項

は、瞿秋白にとって特別の意味があったことを示そうとしているだろう。中共中央から追放された中共第六期四中全会は「一九三四　一月七日」とある。

(37) 周建人「我所知道的瞿秋白同志」及び楊之華「憶秋白」（ともに『憶秋白』人民文学出版社、一九八一年、所収、それぞれ、同書一八四頁、二二一～二二二頁。原載はそれぞれ『解放軍報』一九八〇年三月十六日及び『紅旗飄飄』8、一九五八年七月）。内容が魯迅宛であっても魯迅を宛名にして直接書信を送るのは、身元を隠している獄中の瞿秋白にも、また魯迅にとっても危険なことであったに違いないから、周建人宛（宛名もおそらく工夫されていたろう）書信の中に魯迅宛（とわかる）書信もあった可能性がある。ともかく、この書信に関しては陳鉄健、陳福康・丁言模も瞿秋白から周建人、魯迅宛に別々に各一通届いたとは書いていない。楊之華の書き方が曖昧なのである。なお、楊之華「憶秋白」の十一には、瞿秋白が楊之華と彼女の兄とに宛てた二通の書信を届けにやってくる怪しげな男が登場する。時期的には瞿秋白逮捕のニュースが大々的に報じられた数日後とあり、一九三五年五月十五日頃と思われるのだが、この男は楊之華の親族に瞿秋白が「自首〔転向〕した」と告げたという。結局、兄宛の書信だけが楊之華の手にわたり、楊之華本人宛の瞿秋白最後の「分厚い書信」を男は渡さなかったという。楊之華は瞿秋白の「自首」を信じなかったと強調しているが、読みようによってはこの「分厚い書信」こそ「多余的話」の原形あるいは、その内容を示唆するものではなかったのか（「多余的話」は五月十一日から二二日の執筆。この男が現れた時期が後ろにずれれば、「分厚い書信」が「多余的話」の原本か写しかの可能性が出てくるが、これは単なる仮定に基づく推測に止まる）。陳正醍「瞿秋白『多余的話』の周辺――「郭沫若あての手紙」を中心に」が指摘する郭沫若に宛てた瞿秋白書信の目的同様、この楊之華宛書信も「多余的話」の存在を後世に担保する役割を持ったと考えられないか。楊之華が紹介する彼女の兄宛の瞿秋白書信の内容がそれを示唆しているように思われるのだ。曰く「私のことはすでに新聞で見ていることと思います。私はあなたたちともうすぐ永遠のお別れをしようとしています。之華は私の生涯唯一の知己です。あるいは之華も逮捕されているかも知れません。あなた方がその行方を知るはずがないこともわかっています。しかし、私は之華宛に最後の手紙をどうしても残したい。之華への転送方法がないとも思いますので、そのときには、葉聖陶先生宛に小説を書く材料として、〔楊之華宛の最後の手紙を〕郵送してください。どうぞお大事に」（『憶秋白』

二二三頁。拙訳）と。そして楊之華は瞿秋白の「自首」を信じなかったが、この書信（つまりそれが「多余的話」の原形だとして）に込めた瞿秋白の楊之華への愛は理解したものの、政治的（負の）意味合いも勘案して、この書信を受け取らなかった、あるいは受け取ったにもかかわらず、受け取っていないと書いた、という可能性も考えるべきかも知れない（この最後の書信が「多余的話」の原形だとしたら、瞿秋白は葉聖陶こそ、これを小説にできる最適の作家だと考えていたことになる。これも興味深い）。「失われた」楊之華宛瞿秋白最後の書信は陳正醍「瞿秋白『多余的話』の周辺」の注（2）が「示唆的」と指摘する、周恩来が一九六四年頃、かつて国民党統治区で「多余的話」の真筆原稿を見たことがあると語ったという陸定一の証言などを考えあわせるとき、非常に興味深い（これは、文革中の資料・証言ではあるが、前掲注（10）の新島淳良が「北京で見た瞿秋白批判」で触れる「討瞿戦報」掲載の「多余的話」テキストや、真偽鑑定のエピソードも含めて検討すべきかも知れない）。さらに、夫妻の娘（楊之華と前夫の間に生まれた）瞿独伊の「整理出版後記」（『瞿秋白論文集』重慶出版社、一九九五年、所収）は、楊之華が瞿秋白の遺稿・著作をすべて新中国になって中央档案館に引き渡したと書き、現在『瞿秋白文集　政治理論編』第七巻所収の「多余的話」「編者按」は「中央档案館保存の国民政府档案の手書き写本」が底本だとする。これもまた示唆的である。陳鉄健は改革・開放期の瞿秋白再評価の先駆的な論文「『多余的話』的両段佚文」（丁景唐・陳鉄健ら編『瞿秋白研究文選』）で、当時瞿秋白を拘留していた国民党軍の当事者の話として、「多余的話」は瞿秋白の手跡原稿と、二部の筆写副本があり、後者は国民党の関係部署に送られ、瞿秋白の手跡は本人の希望に従って「某地のある親戚友人〔在某地的一位親友〕」に送られたと書く。時期やルートはわからないが、このうちのどれかが楊之華に渡っていた可能性はまったく想定できないことだろうか。

（38）曹靖華は一九二〇年代初め、留学中のモスクワのクートベ（極東勤労者共産主義大学）で瞿秋白にロシア語を習い、生涯にわたる友となった文学者。魯迅の学生筋に当たる。一九三五年当時は在北京と思われる。

（39）『魯迅全集』には「そのこと」に注はないが、許広平の『魯迅回憶録』は、瞿秋白逮捕を指すとする。五月二二日付曹靖華宛書信と併せて考えれば当然そう読める。『魯迅回憶録専著』下冊（魯迅博物館等選編、北京出版社、一九九九年）所収の許広平『魯迅回憶録』一一九一頁に拠る。松井博光訳日本語版『魯迅回想録』筑摩叢書、一九六八年初

版、一九七五年四版では一八二頁。

(40)『瞿秋白年譜詳編』四四一頁もそう記す。その他、『魯迅書信』五月十七日付胡風宛も「そのニュース〔瞿秋白逮捕〕は間違いなく確かです。ほんとうにひどく残念なことです」と書いている。

(41) 同紙は十四日にも瞿秋白処刑の誤報を載せている。

(42)『魯迅全集』同書信注(1)には「『ゴーリキー論文選集』、『現実』を指す。二稿は現代書局に二百元の前払いを受けていた」とある。のちに、ともに魯迅編の瞿秋白翻訳遺稿集『海上述林』上巻に収録された。

(43) 上海魯迅紀念館編、上海文芸出版社、一九八一年。

(44) 日本語版『魯迅回想録』一八二頁に拠る。許広平の『魯迅回憶録』は間違いが多いことはすでに朱正『魯迅回憶録正誤(増訂本)』(人民文学出版社、二〇〇六年)が指摘しているが、この瞿秋白の逮捕・処刑に関する記述でも、魯迅・許広平の息子、周海嬰主編『魯迅回憶録手稿本』(長江文芸出版社、二〇一〇年)がやはり時間記述の誤りや手稿との異同を指摘している(一五三〜一五四頁)。なお、楊之華は魯迅が瞿秋白を救う希望が失せたときの様子を、伝聞情報として次のように記している。「魯迅は黙然とすわったまま一言も発せず、顔もあげなかった」と(『中国現代文学選集』第十七巻、平凡社、一九六三年、楊之華著新島淳良訳「回想の瞿秋白」五六頁)。その日がいつなのか、楊之華は書いていないが、『魯迅書信』六月十一日付曹靖華宛では「它兄のことはすでに終わりました。今やなにもいうべき言葉がありません」とあり、この頃と思われる。また、新島淳良は、前掲注(10)の「魯迅と瞿秋白」で六月二七日付の魯迅の蕭軍宛書信にある「中国人は、じぶんの手ですぐれた人間を殺しつくしている、秋(白)はその(すぐれた)一人だ」を根拠に、この日までには魯迅は瞿秋白の死を知っていたと書いている。

(45)『海上述林』に収録された瞿秋白の訳文の底本は、上海の亭子間で国民党の白色テロから避難していた瞿秋白夫妻に魯迅が送った原書であった。楊之華は「秋白をいちばん感動させ、よろこばせたものは、魯迅のところからもらった外国語の文芸作品でした。『海上述林』の原文は、避難したときに魯迅がかれにおくったおくりものだったのです」(注(44)の「魯迅と瞿秋白」四六頁に拠る。出典は「秋白と魯迅」とする)。この該当部分は『憶秋白』所収楊之華「憶秋白」の「九」(二一六頁)にある。平凡社版『中国現代文学選集』第十七巻では四四頁。

（46）日高の当時の肩書きについては、和田博文ほか『共同研究　上海の日本人社会とメディア　1870–1945』（岩波書店　二〇一四年）、二八五頁に拠る。

（47）学研版『魯迅全集』第十九巻、『魯迅日記』一九三六年二月の訳注、及び拙著『魯迅とトロツキー』二八六頁、またその注（2）（三一七頁）参照。なお、丸山昇著「魯迅と鹿地亘」（桜美林大学『中国文学論叢』第二一号、一九九六年三月。のち、『魯迅・文学・歴史』汲古書院、二〇〇四年、に収録）は「魯迅と語る」に簡単に触れている。

（48）注（46）に同じ。なお、胡風も四年間の日本留学経験があり、日本語ができたはずだ。

（49）二編ともに前掲『憶秋白』所収。「一個共産党人―瞿秋白」（原載は『党史資料』一九五三年第一期）で、楊之華は「敵が「修正した〔修改過〕」秋白の遺著」としているが、捏造とまでは言っていない点は注目すべきだろう（六一頁）。「憶秋白」（原載は『紅旗飄飄』8、一九五八年七月）該当部分は同書二二三頁。

（50）注（10）の新島淳良「瞿秋白夫人からの手紙」に拠る。

（51）陳正醍「瞿秋白『絶筆詩』考」一二五頁。確かに『救国時報』にはこうした記事がある。

（52）たとえば新中国では、全国婦連や全国総工会の幹部を歴任、文革前には全人代代表になっている。前掲注（22）の『楊之華評伝』「附録　楊之華年譜」に拠る。

（53）正確には楊之華とその前夫との間の子であるが、この子が二歳の時に、楊之華と瞿秋白は再婚しており、瞿秋白の愛情は実の娘と変わらぬものがあったことは、最近出た『秋之白華』（人民文学出版社、二〇一八年十一月）収録の「瞿秋白の楊之華宛書信〔瞿秋白致楊之華信〕」でも明らかである。なお、この書には、瞿秋白・楊之華夫妻の往復書簡のみならず、瞿秋白・王剣虹（瞿秋白の亡妻で丁玲の親友）の往復書簡も収録されていて、興味深い。丁玲研究にも重要な意味を持つだろう。

（54）「多余的話」に詳細な評注を加えた「『多余的話』評注」（劉福勤『心憂書『多余的話』』上海社会科学院出版社、一九八九年、所収）の二七一頁の注（7）もほぼ同じ解釈に立つ。自分を「多余的人」を考えている瞿秋白の心情に見合うものだとするが、その通りだ。他の六編の小説に対する劉評注も概ね首肯できる。なお、本論では他にも同評注と重なる点、参考にした点があることを付言しておく。

(55) 陳独秀などは一九三七年十一月の「陳其昌らへの書信」で「豆腐や白菜がどうのという痛くも痒くもない言葉を自分も言うなどということは絶対にしません」(『陳独秀文選』第三巻、平凡社、東洋文庫、二〇一七年、三六一頁)などと書いているが、これは時期的に見て「多余的話」を踏まえて瞿秋白を当てこすっているという可能性が高いと思われるが、陳独秀も「豆腐の謎」は理解していなかったはずだ。

(56) 前掲注(54)参照。同書二七二頁。

(57) 『瞿秋白研究』13、上海社会科学院出版社、二〇〇五年、三六〇頁。

(58) 現在では、前掲注(53)に挙げた二〇一八年刊行の『秋之白華』で見ることができる。同書には楊之華の未刊行小説「隔離」も収録されている。なお、筆者が「豆腐阿姐」と「多余的話」の問題について公開文書で最初に触れたのは、「二〇一七年度慶應義塾大学学事振興資金研究成果実績報告書」(二〇一八年刊)でのこと。

(59) なお、楊之華は「憶秋白」で、一九二四年のこととして彼女自身、労働運動の必要から上海の製糸工場でストライキ中の女工宅を何軒か訪問したと書いている(『憶秋白』一六頁)。

(60) 謝澹如とも書く。湖畔詩社の詩人で、左翼出版社、金星書店経営。新中国では上海魯迅紀念館副館長など歴任。詳しくは鄭超麟著長堀他訳『初期中国共産党群像――トロツキスト鄭超麟回憶録』2(平凡社、東洋文庫、二〇〇三年)巻末注参照。なお、現在『瞿秋白文集　文学編』第一巻所収の「乱弾」テキストは、謝澹如保存、編集の版でなく、魯迅が瞿秋白から預かって保存していた著者自身による、改訂版テキストである。

(61) 中共中央は一九三二年三月二五日「紅い五月運動についての決議〔中央関於紅五月運動的決議〕」を行い、反帝国主義、反国民党、ソ連擁護の大衆的運動を呼びかけた。五月には、五・一、五・四、五・七、五・九、五・卅など、中共が記念すべき日付が多くあった。『中共中央文件選集　第八冊(一九三二)』(中央档案館編、中共中央党校出版社、一九九一年)に拠る。

(62) 陳福康・丁言模『楊之華評伝』二六八頁。

(63) たとえば、『初期中国共産党群像――トロツキスト鄭超麟回憶録』1(平凡社、東洋文庫)にはかつて丁玲が「瞿秋白を追いかけ回していた」とある。三五八頁。

(64) 蔣祖林『丁玲伝』（人民文学出版社、二〇一六年）第五章「丁玲与瞿秋白」五七頁。著者は丁玲の息子。息子の質問に対する丁玲の答えはなかなか興味深い。曰く「当時瞿秋白は〔王剣虹よりも〕私に恋していて、私が彼に気があると意思表示しさえすれば、〔瞿は〕王剣虹〔の愛〕を受けいれなかったはずだ」と。

(65) 拙著『魯迅とトロツキー』（平凡社、二〇一一年）三二四～三二五頁の注（22）で挙げた『読書』（一九九八年第九期）掲載の座談会「人間魯迅」の牛漢発言に拠る。さらに陳鉄健「導読：書生革命者的悲劇情懐――外曲内直燭照心霊的『多余的話』」には瑞金時代の瞿秋白、毛沢東の二人について、「すでに権力の中心から遠ざかっていた毛沢東は、瞿秋白とは同病相哀れむで、時に交流があった。二人は草原に寝そべって座り、詩を吟じ填詞をし、互いに唱和した。沈鬱で楽しまない瞿秋白に毛沢東はユーモア交じりに聞くのだった。『また楊之華のことを思っているのかい』と」とある。出典は不明。『20世紀中国人的精神生活叢書　多余的話』四～五頁、参照。

(66) 陳漱渝「撲火的飛蛾　丁玲的情感生活」（『撲火的飛蛾　丁玲情感往事』、北方文芸出版社、二〇一七年、所収）参照。

(67) 前掲、楊之華「憶秋白」（『憶秋白』二一八頁）。邦訳は新島淳良訳「回想の瞿秋白」、平凡社版『現代中国文学選集』第十七巻、五〇頁に拠る。

(68) 『楊之華評伝』二六五頁。

(69) 『楊之華評伝』二六三頁がこの小説集の出版時期を一九三二年三月とするのは誤植であろう。

(70) 拙著『魯迅とトロツキー』では、広く見積もって四月半ばから八月半ばとしている。

(71) 楊之華『回憶秋白』（人民出版社、一九八四年）一三三頁。

(72) 『楊之華評伝』「附録　楊之華年譜」に拠る。四八九頁。

(73) 『楊之華評伝』二七六～二七七頁。なお、『魯迅日記』一九三二年九月二五日の「小説稿」とは、現行『魯迅全集』は「楊之華が訳したセラフィモビッチ作『一日の仕事』と『転轍夫』を指す」と注記している。しかし、一九五〇年代の『瞿秋白文集』第四巻、現行『瞿秋白文集　文学編』第四巻もともにこれを瞿秋白の翻訳として収録しているのは、楊之華の意向、あるいは『文集』編集者サイドが瞿秋白の校閲の度合いを勘案してのことであろう。

(74) 梁芳「近五年来瞿秋白『多余的話』研究綜述」（『瞿秋白研究文叢』「紀念瞿秋白誕辰120周年」号（江蘇省瞿秋白研究

会、二〇一八年。ＣＮＫＩではこれ以上の書誌は不詳）が紹介する近年の関連二論文について触れておく。まず、「多余的話」を「暗号」で書かれた遺書と見る、孫果達「瞿秋白説了什麼『多余的話』」（『党史縦横』二〇一八年五期）は「喫豆腐」は当時の上海の俚諺で「用冠冕堂皇的借口占女人便宜〔もっともな理由をつけてただで女を自由にする（扱う）〕」との意味だとし、瞿秋白は「誰喫中国的豆腐」、要するに中国を蹂躙するのは誰かという警句を発しているのだと解釈する。「豆腐」に「中国的」が修飾語としてあることに着目する点はいいが、「豆腐阿姐」で使われている「喫豆腐」の用法はここまで重くはない印象である。むしろ、上海俚諺の「喫豆腐」が帯びる性的色彩が「多余的話」読解には重要だろう。もう一点、林源「読懂『多余的話』的一些想法」（『徐州工程学院学報（社会科学版）』二〇一三年三月）は「多余的話」を瞿秋白が楊之華に宛てた「情書〔ラブレター〕」だとするが、筆者も基本的に賛成である。ただ、林源は瞿秋白が自分の醜いところを楊之華に見せて、自分を忘れさせ、新しい生活に躊躇しないよう仕向けていると言うのは（確かに「多余的話」にはこういう言葉があるが）、表面的に過ぎる解釈ではないか。

(75) 実際、陳・丁『楊之華評伝』も「豆腐阿姐」を「多余的話」の「豆腐」と関連付け、「豆腐阿姐」は「立派なもののイメージ〔美好的形象〕」一般の象徴だとしている。しかし、残念ながら「豆腐阿姐」を楊之華に結びつけるところまでは行き着いていない。

(76) こうした魯迅の認識については拙著『魯迅とトロツキー』の特に「第十章　六―2「魯迅の『同伴者』という自己規定」」など参照。また瞿秋白の自己認識については前掲注（24）で触れた陳正醍論文の通りである。

(77) 前掲注（10）の野澤俊敬「瞿秋白の『多余的話』についての覚書」による（三九頁）。野澤に拠れば出典は、周建人「学習魯迅―把書読活」（『光明日報』一九七一年九月二五日、のち周建人『回憶魯迅』上海人民出版社、一九七六年、に収録）。茅盾はこれについて、陳鉄健宛の書信で「私は瞿秋白とは長年の知り合いで、一九二三～一九二四年には隣に住んでもいたが、彼は詩人気質が極めて濃い人で、犬が畑を耕すと自分を喩えたのは冷静な自己解剖だと見るよりほかない」と書いている（陳鉄健「導読：書生革命者的悲劇情懐」、『多余的話』貴州教育出版社版、二九頁）。なお、王観泉『一個人和一個時代　瞿秋白伝』（天津人民出版社、一九八九年）は、一九二七年（二月十七日付）にすでに瞿秋白は「没有牛時，迫得狗去耕田」という喩えを使っていると指摘しているが、これは「『瞿秋白論文集』自

序」（『瞿秋白選集』、人民出版社、一九八五年、三一一頁。及び『瞿秋白文集　政治理論編』第四巻、人民出版社、一九九三年、四一五頁。『瞿秋白論文集』重慶出版社、一九九五年、二頁）においてのことである。瞿秋白曰く中国の知識階級は旧思想から出てきて程度が低く、中国プロレタリアートの思想的代表である中国知識人もそれゆえ同様であるが、「ただ、革命実践の必要からプロレタリアートの思想を代表して、中国革命の多くの複雑かつ重層的な問題を解決するよう、急速に迫られている。「牛がいないときは、犬に無理矢理、田んぼを耕やさせる」これが中国のマルクス主義者の実情なのである。秋白〔自分〕はマルクス主義者の小学生であり、一九二三年に帰国してから一九二六年十月に病で倒れるまで、一貫して陳独秀同志の指導のもとで、こうした「犬が田んぼを耕す」仕事に精出してきたが、自分でもその任に堪えずということはわかっていた」と。つまり、これが瞿秋白にとっての「犬が田を耕す」の原義なのである（本論後述の周建人が証言する魯迅の解釈はやや原義と離れるニュアンスがある）。これを書いたとき、瞿秋白は、五人の委員からなる中共最高指導部、中央局のメンバーであった。なお、瞿秋白の一九二七年までの自選論文集である『瞿秋白論文集』の原稿はいち早く商務印書館に渡されていたが、四・一二クーデタの混乱で出版されず、一九九五年、ようやく重慶出版社からの出版が実現した。原稿を守り抜いたのは、本文でも触れる謝澹如と、瞿秋白と親しかった元中共幹部で、のちに陳独秀とともにトロツキストに転じた鄭超麟であった。

（78）周建人「略談魯迅」の十一「関於瞿秋白」（『魯迅研究資料』1、一九七九年、爾雅社出版、四六頁）。

（79）『魯迅研究資料』6（天津人民出版社、一九八〇年）掲載の短文、金焦「『同伴者』弁」（同書七四頁）はいち早く、このことを指摘している。なお、魯迅の一人息子周海嬰は文革中の一九七五年十月二八日付の毛沢東宛書信で瞿秋白は「魯迅と知り合った後も終始、魯迅がマルクス主義者であることを認めず、『同伴者』としか言わなかった」と許広平が批判していたと記すが（陳鉄健「導読：書生革命者的悲劇情懐――外曲内直燭照心霊的『多余的話』」、『多余的話』貴州教育出版社版、二六～二七頁）、許広平の批判はこの『国聞週報』のインタビュー記事を指す可能性が高い。許広平が同席した魯迅と瞿秋白との会話の中で、瞿秋白がわざわざ魯迅を「同伴者」と呼ぶ必然性はないし、「『魯迅雑感選集』序言」を読む限り、瞿秋白は魯迅を「同伴者」と規定しているとは思われない（魯迅自身が「同伴者」を自認していたことは知っていたはずではあるが）。

（80）『党史博覧』二〇〇三年第十一期。
（81）王増如・李向東編著、上下巻。天津人民出版社、二〇〇六年。ここは上巻の一〇二頁。
（82）福本勝清著『中国革命への挽歌』（亜紀書房、一九九二年、九一～九二頁）に拠れば上海中央局と瑞金の中共中央との間には一九三一年九月に無線が開通していた。一方、一九三五年六月二十日付「331潘漢年給共産国際駐華代表們的信」（『共産国際、聯共（布）与中国革命档案資料叢書（14）聯共（布）、共産国際与中国蘇埃維運動（1931-1937）』中共党史出版社、二〇〇七年、四四九頁）に拠れば上海中央局は一九三四年十月、国民党の摘発を受け、両者間の無線通信が途絶えたという（上海中央局はこの後、数度の摘発を受け、一九三五年六月に壊滅状態に陥る）。したがって一九三一年九月から一九三四年十月の長征開始ごろまでは、上海と瑞金は無線で結ばれていたことになる。注（22）で述べたように、楊之華は上海で交通工作（つまり、秘密の通信や連絡）に従事していたのだから、瑞金の瞿秋白の動静はある程度知り得たのかも知れない。瞿秋白の方も同様のことが言える。また、上海との無線途絶を、瑞金の瞿秋白も当然、知っていたろうから、この李克長インタビューや注（37）の楊之華の兄に宛てた瞿秋白の書信で楊之華が逮捕されているかも知れないと語るのは、実際に逮捕されていた場合には身元露見の恐れがあって危険だとも考えられる。あるいは瞿秋白には楊之華の安全を確信する根拠があったのだろうか。なお、『楊之華評伝』は、一九三四年七月に、上海党組織が破壊され、ソヴィエト区（瑞金）との「交通（通信を含む）」が断絶して、楊之華と瞿秋白の連絡は途絶えたとする（四九二頁）。また、楊之華は一九三五年の春先に、上海地下党との連絡関係を失い、労働者宅に仮寓し、独自に数人の同志と労働運動を企図したという（四九三頁）。瞿秋白の遭難はこの時期に当たる。
（83）ついでながら、このインタビューでは、陳独秀の一九三二年の逮捕が共産党の密告によるものではないかという質問があり、瞿秋白はこれを否定している。さらに、一九三四年の永定、竜岩での共産党による知識人粛清について聞かれているが、瞿秋白はＡＢ団粛清であって、知識人虐殺ではないと答えている点など、注目すべき内容もある。
（84）前掲注（5）の『文藝』一二一頁。
（85）陳鉄健『瞿秋白伝』四九八～五〇四頁。『瞿秋白年譜詳編』四五四～四六〇頁。
（86）一例を挙げれば、「『吶喊』自序」には、「吶喊である以上、当然、主将の命令はきかねばならない。そこで私は、し

ばしばあえて筆を曲げた。……当時の主将が消極を喜ばなかったからである」とある。

(87) これも一例を挙げれば「豆腐阿姐」も掲載された『北斗』第二巻二期の魯迅「我々はもはや騙されない」は中共の「紅い五月運動」の反帝、ソ連擁護の意図を十分汲んでいよう。

(88) 前掲注(63)参照。

(89) 陳鉄健『瞿秋白伝』(上海人民出版社、一九八六年)、四九七頁。

(90) 前掲注(10)の「瞿秋白『絶筆詩』考」一五六頁及び注(71)。筆者も本論執筆時に『逸経』は確認している。

(91) 劉濤「丁玲論瞿秋白的一篇佚文」(『魯迅研究月刊』二〇一二年四期)に拠れば、丁玲「友人と瞿秋白を語る」は一九三九年十二月の香港誌『大風』に転載されたという。陳正醍「瞿秋白『多余的話』の周辺」(一八六頁)及び「瞿秋白の『獄中詩詞』について」(二一〇頁)に拠れば、瞿秋白の「郭沫若宛書信」と三首の「獄中詩詞」、「完渓沙」「卜算子」「夢回」も同年末に保存者、柳亜子によって『大風』に投稿され、一九四〇年一月の同誌に載っているが、これは同誌が『逸経』の流れを汲む雑誌だったということが関係するようである(一八六頁)。また、前掲注(64)の蒋祖林『丁玲伝』の第五章「丁玲と瞿秋白」(五一頁)で、蒋はこの「丁玲と彼(他)」の「彼」を「瞿秋白」と見なしているが、これが丁玲本人の意見でもあるとすれば、それはやはり丁玲に執筆を促すものとなっただろう。

(92) 邦訳は前掲注(63)の長堀他訳『初期中国共産党群像――トロツキスト鄭超麟回憶録』1・2、平凡社東洋文庫、二〇〇三年。この部分は、邦訳第一巻、二九〇頁の原注(2)。

(93) 「瞿秋白の『獄中詩詞』について――(その一)〈完渓沙〉(上)」、二一六頁。「むだに心力を抛って英雄となる」の意となる。なお、この詩は「己亥雑詩」の一首、『龔自珍全集』(上海人民出版社、一九七五年)では五三七頁。

(94) 『唐弢文集』第七巻、社会科学文献出版社、一九九五年、五四七頁。一九五〇年九月執筆の同編「付記一」(五五二頁)では、同年三月、瞿秋白の遺稿から「子供時代」の切り抜きが見つかったので、この作品が魯迅作でなく、瞿秋白作だとわかったが、『准風月談』が瞿秋白の文章も収めるように、暫時『魯迅全集補遺』からは削除しないでおくと書いている。なお、「付記一」は『魯迅全集補遺』(一九四六年十月初版、ここでは一九五一年十二月六版に拠る)では、「『子供時代』という一文についての説明〔対『児時』一文的説明〕四版後記」というタイトルで「編後記」の

あとに収められている。今では「子供時代」は『瞿秋白文集　文学篇』第二巻に収録されている。なお「猛憶」は上記『龔自珍全集』では四九五頁。

(95)「魯迅「自題小像」詩成立考」、『信州大学人文学部紀要　人文科学論集』第十六号、一九八二年三月、が初出と思われるが、ここでは同編の中国語版「魯迅「自題小像」生成考」『信州大学人文社会科学研究』第四号、二〇一一年、四月、に拠る。

(96)『亡友魯迅印象記』人民文学出版社、一九七七年、八四～八五頁。

付記

(1) 本論執筆に当たっては、資料その他の面で以下の方々の援助をいただいた。記して謝意を表する。京都大学総合人間学部教授・江田憲治氏、慶應義塾大学経済学部講師・王俊文氏、清華大学中文系教授・王中忱氏、早稲田大学商学学術院教授・小川利康氏、慶應義塾大学経済学部講師・金スンオグ氏、東京大学文学部助教・白井澄世氏、日本大学文理学部教授・山口守氏（五十音順）。なお、本研究は二〇一九年度科研費基盤研究C「周氏兄弟と『新青年』グループ」の成果の一部である。G・ベントン英国カーディフ大学名誉教授にも感謝する。

(2) 本論再校に際し、直近の『伝記文学』（二〇一九年十二月号、第一一五巻第六期、総号六八一号、台湾伝記文学出版社）掲載の肖伊緋著「瞿秋白被捕就義始末――以北平『世界日報』相関報道為中心」を見る機会を得た。当該論文は北京の『世界日報』が瞿秋白の逮捕、処刑の経過を詳報する一九三五年五月十五日から七月三日の記事を紹介していて興味深い。魯迅は同紙に寄稿歴があり、瞿秋白遭難時にも上海で見ていた可能性を否定できないからである。

(3) 一点、（注7）の呉基民の記述を補強する資料を補充する。陳鉄健「導読：書生革命者的悲劇情懐――外曲内直燭照心霊的『多余的話』」は、一九五〇年、毛沢東が楊之華の求めに応じ、旧版『瞿秋白文集』（一九五三～四年、人民文学出版社刊）のために題辞を認（したた）め、楊之華宛の封筒に封入したものの未発送に終わり、毛沢東死後の一九八〇年、その題辞が発見されたと書く（『二〇世紀中国人的精神生活叢書　多余的話』十六頁）。毛沢東の、未刊の題辞は以下の通り。

瞿秋白同志が死去して十五年になる。生前、多くの人は彼を理解せず、彼に反対する者もいたが、人民のために働くという彼の勇気は挫けることはなかった。彼は革命の困難な歳月にあって英雄的立場を堅持し、首切り役人の刃にかかろうとも、屈服しようとはしなかった。こうした人民のために働こうとする精神、危難に臨んで屈することのない意志、それに文字として残した思想は永遠に生き続け、滅ぶことはないだろう。瞿秋白同志は積極的に頭を働かせて問題を考える人であり、思想を持っていたのだ。その遺著の出版は青年たちに有益であり、人民の集団事業、特に文化事業の方面において有益である。

毛沢東　一九五〇年十二月三十一日

もしこの題辞が楊之華に発送され、旧版『瞿秋白文集』の巻頭を飾っていたなら、文革初期、毛沢東が一九三〇年代の中共内の偽装転向問題を劉少奇追い落しに利用すべく、「多余的話」を「裏切り＝転向」の文章に仕立てあげることは不可能であったろう。毛沢東は一九五〇年、来るべき党内闘争をすでに見据えていたということになる。果たせるかな、文革で自己の絶対的権威を打ち立てようとしていた毛沢東にとって、「多余的話」は、その死後も中共党史上に保持された瞿秋白の高い威信（一九四五年の中共六期七中全会決議「若干の歴史問題についての決議」参照）を失墜させると同時に、文革発動当時の党内最大ライバル劉少奇をも失脚に追い込む、まさに一石二鳥の切り札となったのである（三校に際して記す）。